

静岡県三島市

HAKONEKYUKAIDOU

# 箱根旧街道 ほか

笹原山中バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(その5)

中山城 F 遺跡 山中城 G 遺跡  
遺跡推定地 横道遺跡  
中山城 H 遺跡

2018

三島市教育委員会





箱根旧街道石疊復元状況



## 序 文

静岡県東部、伊豆半島の付け根に位置する三島市は温暖な気候と豊富な湧き水に恵まれ、古来より人々の生活の好適地がありました。その証拠に『三島市遺跡地図地名表』からは、487ヶ所の遺跡が登録されていること、市街地の南に扯がる肥沃な平野部には弥生時代以降の遺跡が集中し、市域の北東部にあたる箱根山西麓の丘陵地帯には旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡が密集していること等が読み取れます。

昭和63年度に事業化された一般国道1号笛原中山バイパスは、この箱根山西麓の遺跡密集地を大きく蛇行しながら通過します。そこには旧石器時代や縄文時代の遺跡ばかりではなく、国の指定史跡として有名な山中城跡や、箱根旧街道石畳が存在するため、バイパスの線形を決定するまでには大きな困難がありました。しかし度重なる協議の結果、当時の建設省の英断により山中城跡周辺では史跡への影響を最小限にとどめるように道路線形を設計変更し、箱根旧街道との交差部分はトンネルにして工事終了後に石畳を復元することになりました。

笛原中山バイパス発掘調査報告書全5巻の掉尾を飾ることになった本報告書は、石畳の復元整備が主な内容になっています。三島市には平成6年度から9年度にかけて約2kmの石畳整備の実績があり、その経験を基に今回も実測図通りに石材を敷き直す復元整備を行いました。しかし手法は同じであっても、新たに電子平板を利用して座標管理をするなど、平面的な石材配置については格段の精度向上を果たしています。こうした成果を詳細に記述した本書が多くの方々に活用され、学術研究の進展に、あるいは郷土史理解の一助として役立つことを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査と石畳の復元整備ならびに報告書作成にあたっては、国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所、静岡県教育委員会をはじめ多くの関係諸機関にご指導、ご協力を賜りました。また、夏季の焼けつくような暑さや冬季の凍えるほどの寒さの中、労苦を厭わず発掘調査に従事された作業員の方々に対し、心よりお礼を申し上げまして刊行のことばといたします。

平成30年3月

三島市教育委員会  
教育長 西島 玉枝

## 例　　言

- 本書は、山中城F遺跡（3地点）、山中城G遺跡（4・5・16地点）、遺跡推定地（6・7地点）、隧道遺跡（2地点）、山中城H遺跡（15地点）の発掘調査報告書と箱根旧街道の復元整備事業報告書である。ここでいう地点名は、バイパス建設工事に伴う発掘調査に便宜的に付した番号であり、三島市の発掘調査地点番号とは符合はしない。
- 各調査は、一般国道1号笛原山中バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、国土交通省中部地方整備局沼津河川国道事務所の委託を受け、三島市教育委員会が実施した。
- 発掘調査は、辻真人が担当し、平成7年2月14日から平成24年12月21日まで断続的に実施した。また、山中城G遺跡（16地点）の箱根旧街道石畳復元整備工事は、平成29年6月22日～12月5日まで実施した。各年度の業務代理人は以下の通りである。

平成7年度 株式会社静岡人類史研究所 武田英俊

平成18年度 株式会社シン技術コンサル 山本 久

平成23・24年度 株式会社シン技術コンサル 相澤正信

平成29年度 小野建設株式会社 滝山正美 株式会社シン技術コンサル 中山田出夫

- 各調査の整理作業は、三島市教育委員会が株式会社シン技術コンサルに委託し、平成29年6月8日～平成29年3月16日まで実施した。
- 本文中の上部ローム層の名称は、漸移層を「ZN層」、休場上層を「YLU層」、休場中層を「YLM層」、休場下層を「YLL層」、各休場層の下位に認められるスコリアを「YL-S1」、「YL-S2」、「YL-S3」、第0黒色帯を「BB0層」、第Iスコリア帯を「SC-I」、第I黒色帯を「BBI層」、ニセローム層を「NL層」、始良・丹沢バミスを「AT」、第II黒色帯を「BBII層」、第IIスコリア帯を「SC-II」、第III黒色帯を「BBIII層」、第3スコリア帯を「SC-III」と表記している。
- 本書で使用する「箱根旧街道」「石畳」という名称は、「箱根旧街道石畳整備事業報告書1999 三島市教育委員会」に倣い使用している。
- 本書の執筆は、第1章第1節、第6章、第7章を辻が、他を相澤が行い、編集は辻、新井かおり（シン技術コンサル）が行った。各調査事業、整理事業の計画・調整業務は辻が行った。石畳図作成は小林正輝、須藤恭子（シン技術コンサル）が行った。画像編集、写真図版作成は坂本勝一（シン技術コンサル）が行った。
- 本報告における図面、写真、遺物等の調査資料は三島市教育委員会で保管している。
- 発掘調査・整理事務局

### 【平成7年度】三島市教育委員会

教育次長 大湖 教男 社会教育課長 佐藤 啓之

社会教育課課長補佐 鈴木 義晴 文化係副主任 野澤 秀里

文化係主査 遠藤 信和

文化係主事 小坂 力也 諏訪部 尚

文化係指導主事 渡邊 浩之

文化係学芸員 鈴木 敏中 芦川 忠利 寺田 光一郎 辻 真人

【平成 18 年度】三島市教育委員会

教育部長 有尾 克人 文化振興課長 佐野 隆一  
文化振興課課長補佐 徳野 茂雄  
文化振興係副主任 池田 智美 松田 孝之  
文化振興係主任 大林 敦 岩田 和史  
文化振興係主任学芸員 鈴木 敏中  
文化振興係学芸員 芦川 忠利 寺田 光一郎 辻 真人

【平成 23 年度】三島市教育委員会

教育部長 杉山 孝二 教育部参事 青木 良雄  
文化振興係長 池田 健二 文化振興係副主任 昌 和哉  
文化振興係主任 石井 章代 文化振興係主任 井上 慎介  
文化振興係主任補 鈴木 和可子  
文化振興係学芸員 芦川 忠利 寺田 光一郎 辻 真人

【平成 24 年度】三島市教育委員会

教育部長 杉山 孝二 教育部参事 青木 幸博  
文化振興課課長補佐 池田 健二 文化振興係主任 橋本 泰浩  
文化振興係主任 昌 和哉 文化振興係主任 鈴木 和可子  
文化振興係主任学芸員 芦川 忠利 寺田 光一郎 辻 真人

【平成 29 年度】三島市教育委員会

教育推進部長 小池 満 地方文化財室長 芦川 忠利  
郷土文化財室主任 寺田 光一郎 地方文化財室主任学芸員 辻 真人  
郷土文化財室副主任 石間 可奈子 地方文化財室臨時学芸員 吉野 文彬

10. 本報告書執筆にあたり次の方々に御教示・御協力を頂いた。厚く感謝申し上げる次第である。

(敬称略・順不同)

佐藤正知 河合 修 山田啓子 小野建設株式会社 杉江製陶株式会社

## 凡　　例

1. 本書の第 1 図で使用した地形図は、三島市発行三島基本図 C-4・5、D-4・5 (1/5,000) である。
2. 本書における方位は、世界測地系第Ⅷ区に基づく座標北である。標高 (T.P.) を各土層断面に記している。但し、本書は測地成果 2011 には対応していない。
3. 各調査地点の全体図のうち、周辺の現況測量を行っていない樋道遺跡 (2 地点)、山中城 H 遺跡 (15 地点)、遺跡推定地 (6・7 地点) に関しては、三島市都市計画図 1/10,000 よりセンターの再トレースを行い使用している。
4. 各挿図の縮尺は原則として以下の通りである。  
調査地点全体図 (1/300・1/500)、土層柱状図 (縦 1/80・横 1/160)、石壁全体図 (1/300) 石壁分割図 (1/100)
5. 遺物挿図の縮尺  
陶製トラフ (1/8)
6. 各挿図に使用した主なトーン表現は、以下の通りである。その他に使用したトーンは、各挿図に凡例を付してある。

調査範囲 本調査範囲 黒色帶 スコリア層 江戸時代の石材 根府川石

## 目 次

卷頭図版	
序文	1
例言	1
凡例	2
目次	2
第1章 調査と環境	1
第1節 発掘調査・復元整備に至る経緯	1
第2節 遺跡の立地と歴史的環境	2
1. 遺跡の立地	2
2. 歴史的環境	2
第2章 平成7年度事業	4
第1節 山中城F遺跡（3地点）	4
1. 遺跡の位置	4
2. 調査の概要	4
3. 基本層序	5
4. 調査の成果	5
第3章 平成18年度事業	6
第1節 山中城G遺跡（5地点）	6
1. 遺跡の位置	6
2. 調査の概要	6
3. 基本層序	6
4. 調査の成果	7
第4章 平成23年度事業	8
第1節 遺跡推定地（7地点）	8
1. 遺跡の位置	8
2. 調査の概要	8
3. 基本層序	9
4. 調査の成果	9
第2節 遺跡推定地（6地点）	10
1. 遺跡の位置	10
2. 調査の概要	10
3. 基本層序	11
4. 調査の成果	11
第3節 槻道遺跡（2地点）	12
1. 遺跡の位置	12
2. 調査の概要	13
3. 基本層序	13
4. 調査の成果	13
第5章 平成24年度事業	14
第1節 山中城H遺跡（15地点）	14
1. 遺跡の位置	14
2. 調査の概要	15
3. 基本層序	15
4. 調査の成果	16

第2節 山中城G遺跡(4地点) .....	17
1. 遺跡の位置 .....	17
2. 調査の概要 .....	17
3. 基本層序 .....	18
4. 調査の成果 .....	18
第3節 山中城G遺跡(16地点) .....	19
1. 遺跡の位置 .....	19
2. 調査の概要 .....	19
3. 基本層序 .....	19
4. 調査の成果 .....	20
第6章 平成29年度事業 箱根旧街道石畳復元整備事業 .....	22
第1節 復元整備事業の経過 .....	22
第2節 石材搬出 .....	22
第3節 復元整備 .....	22
第7章 総括 .....	31
第1節 一次調査 .....	31
第2節 復元整備事業 .....	31
写真図版 .....	
抄録 .....	

## 挿図目次

第1図 遺跡の範囲と調査地点の位置 .....	3	第15図 4地点土層柱状図 .....	18
第2図 3地点全体図 .....	4	第16図 16地点全体図 .....	19
第3図 3地点土層柱状図 .....	5	第17図 16地点土層断面図 .....	20
第4図 5地点全体図 .....	6	第18図 16地点出土遺物 .....	21
第5図 5地点土層柱状図 .....	7	第19図 整備区間位置図 .....	23
第6図 7地点全体図 .....	8	第20図 石畳復元方法概略図 .....	23
第7図 7地点土層柱状図 .....	9	第21図 石畳グリッド全体図 .....	24
第8図 6地点全体図 .....	10	第22図 石畳復元比較全体図 .....	25
第9図 6地点土層柱状図 .....	11	第23図 石畳復元比較図(1) .....	26
第10図 2地点全体図 .....	12	第24図 石畳復元比較図(2) .....	27
第11図 2地点土層柱状図 .....	13	第25図 石畳復元比較図(3) .....	28
第12図 15地点全体図 .....	14	第26図 石畳復元比較図(4) .....	29
第13図 15地点土層柱状図 .....	16	第27図 石畳復元比較図(5) .....	30
第14図 4地点全体図 .....	17		

## 表目次

第1表 調査地の事業名称 .....	1	第2表 16地点遺物観察表 .....	21
--------------------	---	---------------------	----

## 図版目次

- |       |   |       |   |
|-------|---|-------|---|
| 図版 1  | 1. 3 地点一次調査グリッド完掘状況（東から）<br>2. 3 地点 29 グリッド東壁土層断面（西から）  | 図版 11 | 1. A ライン石豈断面（西から）<br>2. B ライン石豈断面（西から）  |
| 図版 2  | 1. 5 地点一次調査グリッド完掘状況（東から）<br>2. 5 地点 4 グリッド北壁土層断面（南から）   | 図版 12 | 1. C ライン石豈断面（西から）<br>2. 箱根旧街道石豈撤去状況（西から）  |
| 図版 3  | 1. 7 地点一次調査トレンチ完掘状況<br>(南東から)<br>2. 7 地点 B ライン北東壁土層断面（南西から）   | 図版 13 | 1. 16 地点出土遺物  |
| 図版 4  | 1. 6 地点一次調査グリッド完掘状況（北から）<br>2. 6 地点 5 グリッド東壁土層断面（西から）   | 図版 14 | 1. 石豈清掃・グリッド設定作業（南から）<br>2. 石豈石材撤去・搬出作業 1（東から）<br>3. 石豈石材注記作業（西から）<br>4. 石豈石材撤去・搬出作業 2（東から）<br>5. 石豈石材撤去・搬出作業 3（東から）<br>6. 石豈石材撤去・搬出作業 4（北から）<br>7. 石材搬出作業（東から）<br>8. 一時保管養生状況（南から） |
| 図版 5  | 1. 2 地点完掘状況（北から）<br>2. 2 地点 1 グリッド北壁土層断面（南から）   | 図版 15 | 1. 基準点測量（東から）<br>2. グリッド復元作業（西から）<br>3. 石豈石材座標復元作業 1（西から）<br>4. 石豈石材復元作業 1（東から）<br>5. 東半部石豈石材復元状況（西から）<br>6. 石豈石材復元作業 2（西から）<br>7. 石豈石材座標復元作業 2（西から）<br>8. UAV 航空写真撮影（南から）          |
| 図版 6  | 1. 15 地点一次調査 2 レンチ完掘状況<br>(東から)<br>2. 15 地点 4 グリッド北東壁土層断面<br>(南西から)                                   | 図版 16 | 1. 石豈復元状況（西から）<br>2. 石豈復元状況遠景（南から）  |
| 図版 7  | 1. 4 地点完掘状況（垂直から）<br>2. 4 地点 2 グリッド北壁土層断面（南から）  |       |   |
| 図版 8  | 1. 16 地点箱根旧街道石豈検出状況（東から）<br>2. 16 地点箱根旧街道石豈撤去状況（東から）  |       |   |
| 図版 9  | 1. 16 地点 2 グリッド陶製トラフ検出状況<br>(西から)<br>2. 16 地点 2 グリッド埋設ケーブル検出状況<br>(西から)<br>3. 16 地点 1 グリッド東壁土層断面（西から） |       |   |
| 図版 10 | 1. 箱根旧街道石豈検出状況（西から）<br>2. グリッド設置状況（西から）   |       |   |

## 第1章 調査と環境

### 第1節 発掘調査・復元整備に至る経緯

昭和61年12月19日、静岡県教育委員会と三島市教育委員会は建設省沼津工事事務所（当時）より、一般国道1号山中道路路線計画ルート内の文化財について照会を受けた。この計画は国道1号のうち神奈川・静岡県境の箱根峠より三島市街地に至る区間は幅員が狭小で平面線形が悪く急勾配のうえに、沿道にはいくつかの集落が拡がっているため、交通安全等の面から局部改良の一環として道路整備を計画するものであった。これに対して市教育委員会は、昭和62年1月12日付で当該路線区域内には国指定史跡山中城跡、国指定史跡候補地箱根旧街道が存在している旨の報告を行い、さらに昭和62年6月3日付で「計画道路の通過が許されない文化財とその範囲」と「発掘調査が必要な文化財とその範囲」の報告を行った。そして昭和63年1月の打合せでは、建設省から道路と山中城ラオシバ曲輪との交差部分はトンネル、箱根旧街道の交差部分は歩道橋という案が示され、これに対して市教育委員会は複数回に及ぶ文化庁との協議と指導に基づいて、道路と箱根旧街道が交差する3箇所は立体交差化するよう改善要望を提出した。

ところが平成元年になると建設省から、山中城ラオシバ曲輪との交差部分はトンネル構造からオープン掘削構造に、箱根旧街道との交差部分2箇所はボックス構造、残る1箇所は平面交差とする変更要請が出された。しかし、こうした変更はラオシバ曲輪の消滅を意味し、また箱根旧街道が道路によって分断されることは計画している史跡指定が困難になるため、文化財保護の立場からは決して容認できる内容ではなかった。そのため市教育委員会と県教育委員会は文化庁との協議を度々行い、平成2年7月27日にラオシバは重要な曲輪でありルート変更されたい、箱根旧街道との交差部分2箇所はボックス構造として旧街道の復元をされたい、平面交差となる箇所についてはルート変更されたい、との要求を行った。

これに対して建設省からは、すでに地権者との用地立合も完了しているのでルートの変更は計画の白紙撤回と同じであり無理であること、構造上トンネル化はできない、箱根旧街道との平面交差部分は横断歩道橋で検討する、との回答であった。ルート変更を求める教育委員会と、現ルートの中で構造対応を主張する建設省、両者の主張は平行線をたどり交渉は長期化した。

しかし、平成3年1月19日の建設省、市教育委員会と県教育委員会の協議で建設省より、ラオシバ曲輪と西ノ丸西側はバイブルーフ構造のトンネルにして遺跡を保護する、西ノ丸北側は植栽により景観に配慮する等の、構造対応による新提案が出された事により交渉は一気に前進する。そして平成3年3月25日の建設省、県教育委員会の協議において、山中城についてはラオシバ曲輪と西ノ丸西側の尾根はバイブルーフ工

第1表 調査地点の事業名称

調査期間	遺跡名	地点名	事業名称	調査面積
平成7年2月14日～3月20日	山中城F遺跡	3地点	平成6年度 一般国道1号箱根山中ハイバス建設工事に伴う記録保存調査	257.5m <sup>2</sup>
平成18年11月28日～12月25日	山中城G遺跡	5地点	平成18年度 一般国道1号箱根山中ハイバス建設工事に伴う記録保存調査	36m <sup>2</sup>
平成24年1月11日～1月19日	遺跡推定地	7地点	平成23年度 一般国道1号箱根山中ハイバス建設工事に伴う記録保存調査	47.2m <sup>2</sup>
平成24年1月17日～1月28日	遺跡推定地	6地点	平成23年度 一般国道1号箱根山中ハイバス建設工事に伴う記録保存調査	24.6m <sup>2</sup>
平成24年1月25日～3月14日	種遺跡	2地点	平成23年度 一般国道1号箱根山中ハイバス建設工事に伴う記録保存調査	151.8m <sup>2</sup>
平成24年8月1日～9月14日	山中城H遺跡	15地点	平成24年度 一般国道1号箱根山中ハイバス建設工事に伴う記録保存調査	110m <sup>2</sup>
平成24年9月19日～10月31日	山中城G遺跡	4地点	平成24年度 一般国道1号箱根山中ハイバス建設工事に伴う記録保存調査	108m <sup>2</sup>
平成24年11月6日～12月21日	山中城G遺跡	16地点	平成24年度 一般国道1号箱根山中ハイバス建設工事に伴う記録保存調査	274.7m <sup>2</sup>

法によりトンネルとする、トンネル出入り口部分は城跡との景観に調和したものにする、両トンネル間は植栽を施して山中城からバイパスが見えないように景観に配慮する。箱根旧街道については、浅間平地区東側は景観に調和した横断歩道橋（後に横断歩道に変更）を設置する、浅間平地区西側と上長坂地区は消滅範囲を最小限にしてボックスカルバート工法で施工後に旧街道の姿を復元する、という工事内容について合意して文化庁に報告、今後は市教育委員会を窓口として協議・発掘を進めていくことになった。

発掘調査は平成5年度に着手したが、建設者の予算措置の都合により平成7年度から13年度まで中断し、平成14年度に再開して25年度に計画範囲の発掘調査を終了した。本報告書掲載の5遺跡、2遺跡推定地の発掘調査は、平成7・18・23・24に実施し、箱根旧街道石畳の復元整備工事は平成29年度に実施した。

## 第2節 遺跡の立地と歴史的環境

### 1. 遺跡の立地

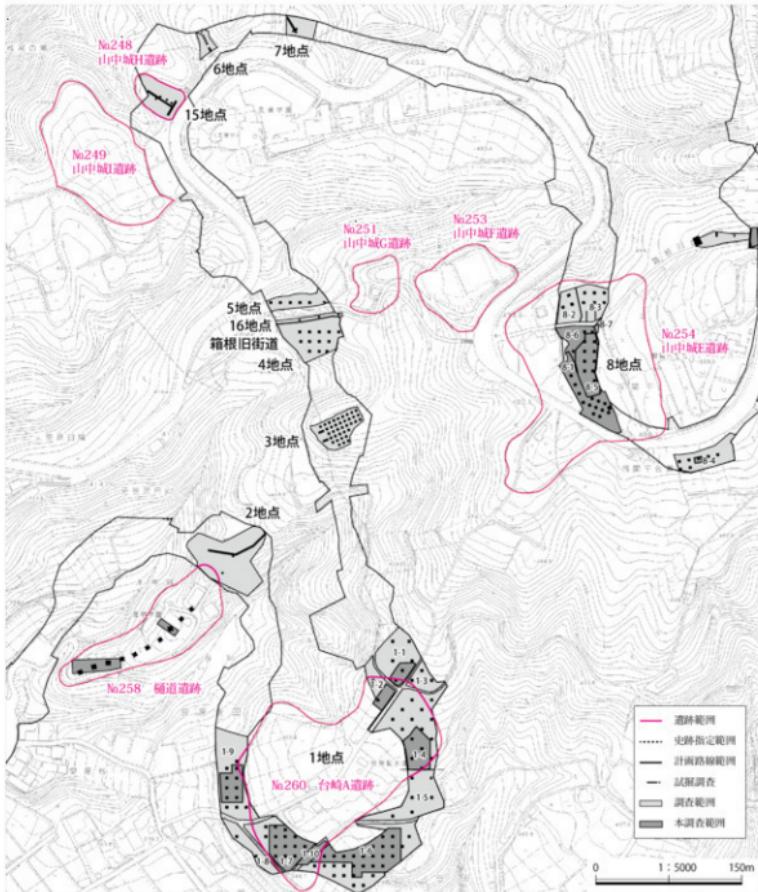
今回、発掘調査が行われた山中城F遺跡（3地点）山中城G遺跡（4・5・16地点）遺跡推定地（6・7地点）極道遺跡（2地点）山中城H遺跡（15地点）は、静岡県東部の中核都市である三島市に所在する。三島市の地勢は、その地形と地質的特徴により、大きく四区分されている。第一は、市域の北部から、三島駅付近までの「三島溶岩流地」である。今から約14,000年前に噴火した新富士火山の溶岩によって形成されたものであり、厚い所では約90mにも及ぶ。第二は、三島駅付近から中郷温泉池に至る「三島扇状地」あるいは「黄瀬川扇状地」と呼ばれている地域である。第三は、市域の南側に広がる田方平野の、「狩野川流域低地」である。第四は、本遺跡が位置する市域の約3分2を占める「箱根火山山麓地」である。箱根山は、約40万年前に活動を開始した標高2,700mにも及ぶ成層火山であり、その後の噴火の繰り返しによるカルデラの形成、侵食期によって隔てられた3回の活動によって形成されたと長らく言われてきた。近年、箱根火山の形成史の再検討がなされ、箱根山は約65～35万年前に活動が開始された火山であり、中小規模の成層火山と單成火山群から構成されており、複数の小型カルデラの形成・連結等によって現在の山体が形成されたと考えられている。また、約10万年前から活動を開始した古富士火山は、多量のスコリアや火山灰を降下させ、厚いローム層を形成し、箱根山西麓になだらかな緩傾斜地を形成している。この緩傾斜地を山田川や来光川を始めとする多くの中小河川が開析する、小さな尾根を幾つも派生させた八つ手状の丘陵地形が形成された。各遺跡は、こうした丘陵の南斜面の標高約388～427mに立地している。

### 2. 歴史的環境

ここでは、極道遺跡、山中城F遺跡、山中城G遺跡、山中城H遺跡と周辺に所在する山中城I遺跡、山中城E遺跡、台崎A遺跡、国指定史跡山中城の概略を記述する事とした。箱根山西麓周辺の遺跡の詳細については、初音ヶ原遺跡、山中城遺跡、山中城D遺跡、山中城E遺跡等の既刊報告書に詳述されているため、そちらを参照していただきたい。

極道遺跡No.258は、過去に発掘調査が行われていたが、報告書が未刊行のため詳細は不明である。旧石器時代の石器、縄文時代中期の住居跡、早期・前期の土器が出土している。山中城F遺跡No.253は、縄文時代前期の遺物散布地、山中城G遺跡No.251は、縄文時代早期・中期の遺物散布地、山中城H遺跡No.248は、縄文時代後期の遺物散布地として遺跡登録されている。いずれも採取資料による遺跡登録であり、詳細については不明な点が多い。周辺の遺跡としては、山中城I遺跡No.249、山中城E遺跡No.254、台崎A遺跡No.260がある。山中城I遺跡は農地造成によって削平されているが、古墳時代の遺物散布地として登録されて

いる。山中城E遺跡、台崎A遺跡は、ともに芦原山中バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われており、山中城E遺跡では、旧石器時代、縄文時代、中世～近世の遺構・遺物が検出され、特に旧石器時代では2,183点の石器、431点の礫が出土している。台崎A遺跡№260は、バイパス予定地に10箇所の調査区が設定され、旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物が検出された。主体となる旧石器時代では、12,790点の石器、764点の礫が出土している。国指定史跡山中城跡は永禄年間に築城されたといわれ、天正18年、豊臣秀吉によって僅か1日で落城した。その後は山林や畠地となっていたため、保存状態が極めて良好な城跡であり、昭和48年より10次に渡る発掘調査が開始され、その後継続した発掘調査、史跡整備が行われ、現在は箱根山西麓を代表する観光名所となっている。



## 第2章 平成7年度事業

### 第1節 山中城F遺跡（3地点）

#### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、箱根山西麓の中腹、山田川と来光川に挟まれた丘陵から、西方向に突出した幅25m程の尾根部に位置する。尾根部は南西方向へ傾斜しており、標高は約439.68m～448.10m、比高差は8.42mを測る。

本地点周辺の遺跡では、北約100mには4地点があり、南約300mには12,790点の石器、764点の礫が出土した台崎A遺跡が所在する。また、約1km東には後北条氏第3代北条氏康によって築城されたと伝えられる「障子堀」、「敵堀」で著名な国指定史跡山中城跡が所在する。

#### 2. 調査の概要

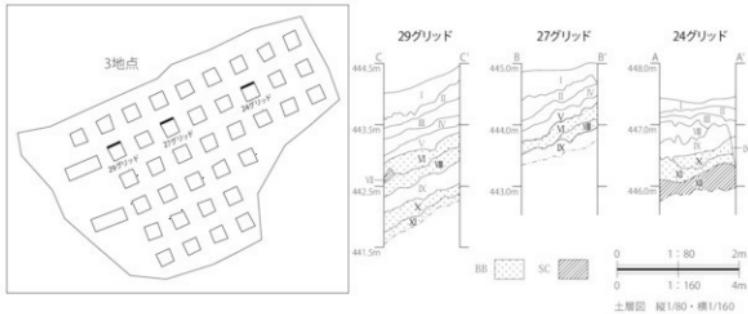
山中城F遺跡は、縄文時代前期の土器の散布地として登録されており、本地点においても縄文時代前期の集落の存在が想定されていた。一次調査は遺構、遺物の広がりを確認するため、尾根上の東西50m、南北25m程度の狭小な平坦面と、その周辺の傾斜の緩やかな斜面地を対象として、2.5m×2.5mのグリッドを等間隔に38箇所、2m×5mのトレンチを2箇所設定し、遺構、遺物の検出作業を行った。



第2図 3地点全体図

### 3. 基本層序

- I : 表土層。腐葉土を主体とする黒色土層。粘性は強いが、締りは弱い。
- II : ZN 層。暗黄褐色ローム漸移層。粘性はやや強いが、締りはやや弱い。 $\phi$  5mm 以下のスコリアを含む。
- III : YLU 層。黄褐色ローム層。粘性は強く、締りもやや強い。層中に細かいスコリア粒をわずかに含む。
- IV : YLM 層。黄褐色土ローム層。粘性、締りは共に強い。 $\phi$  3 ~ 4mm 大のスコリア粒を含む。
- V : YLL 層。明黄褐色土ローム層。粘性はやや弱く、締りは強い。 $\phi$  2mm 前後のスコリア粒を多量に含む。
- VI : BBO 層。黒褐色土ローム層。粘性は強く、締りはやや弱い。層中に  $\phi$  4mm 前後の橙色、黒色のスコリア粒を含む。
- VII : SC-I 層。赤褐色スコリア層。粘性、締りは共に強い。 $\phi$  2 ~ 10mm 大の赤褐色スコリアを主体とし、黒色スコリアを含む。
- VIII : BB-I 層。淡黒褐色ローム層。粘性、締りは共に強い。 $\phi$  2 ~ 3mm 大の橙色、黒色のスコリア粒を含む。
- IX : NL 層。黄褐色土ローム層。粘性は弱いが、締りは強い。層中に橙色、黒色のスコリア粒を多量に含む。
- 24 グリッドでは小規模な断層が確認される。
- X : BB-II 層。黒褐色ローム層。粘性、締りは共に強い。 $\phi$  3mm 前後のスコリア粒を多量に含む。
- XI : BB-III 層。黒褐色ローム層。粘性、締りは共に強い。 $\phi$  5 ~ 7mm 大のスコリア粒を含み、BB-II 層に比べスコリアの含有量が多い。
- XII : SC-III 層。暗黄褐色スコリア層。粘性は弱いが、締りは強い。 $\phi$  2mm 大のスコリア粒を多量に含む。



第3図 3地点上層柱状図

### 4. 調査の成果

本調査地点の土層堆積状況は不安定なものであり、存在が想定されていた縄文時代前期の集落跡は確認されなかった。三方を傾斜面に囲まれた狭小な尾根部は、ZN 層上位の縄文時代の包含層は確認されず、土層断面に認められる断層の様相から、しぼしば地滑り等の自然災害に襲われてきたことが推測される。本調査地点は、遺跡の成因条件に適した土層堆積は確認できず、遺構、遺物は検出されなかった。

## 第3章 平成18年度事業

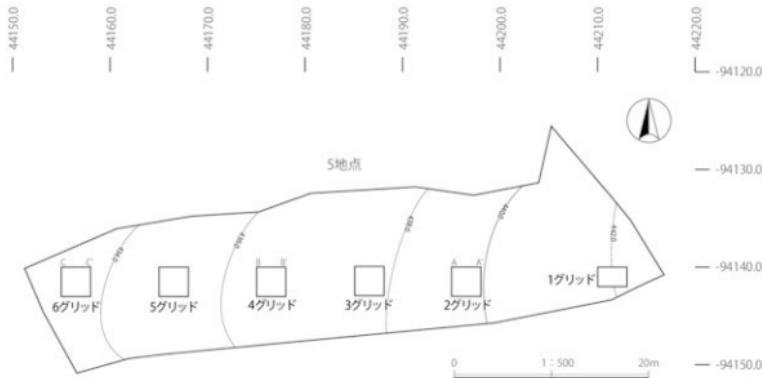
### 第1節 山中城G遺跡（5地点）

#### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、国道1号バイパスと箱根旧街道が交わる上長坂地区より東へ約100m入った丘陵に位置する。標高は約433.54m～440.87m、比高差は7.33mを測る。本地点周辺の遺跡では、南には16地点として調査・復元整備を行った旧箱根旧街道石畳が隣接し、さらにその南側には4地点が所在する。

#### 2. 調査の概要

山中城G遺跡は、縄文時代早期・中期の散布地として登録されており、本調査地点においても縄文時代早期・中期の遺構・遺物の存在が想定されていた。一次調査は遺構・遺物の広がりを確認するため、西側へ傾斜する耕作地に並行する形で2m×3mのグリッドを1箇所、3m×3mのグリッドを5箇所設定し、遺構・遺物の検出作業を行った。

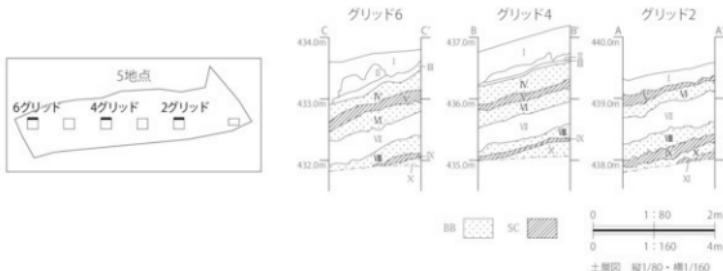


第4図 5地点全体図

#### 3. 基本層序

- I : 表土層。耕作土を主体とする黒色土層。
- II : YLL層。黄褐色ローム層。粘性、縮りは共に強い。φ 3～10mm 大の赤・灰・黒色スコリアを含む。
- III : YLS-3層。赤褐色・赤褐色スコリア層。粘性、縮りは共に強い。YLS-1層と類似する。
- IV : BBO層。暗褐色ローム層。粘性、縮りは共に強い。φ 1～3mm 大の白色スコリアを多く含む。φ 2～12mm 大の赤褐色、灰色、黒色スコリアを含む。
- V : SC-I層。赤褐色スコリア層。粘性は弱いが縮りは強い。φ 2～10mm 大の赤褐色スコリアを主体とし、黒色スコリアを含む。

- VI : BB I 層。暗褐色ローム層。粘性、繊りは共に強い。φ 2 ~ 7mm 大の赤色、黒色スコリアを小量~中量含む。
- VII : NL 層。黄褐色ローム層。粘性、繊りは共に強い。BB I・BB II 層に比べ非常に硬く締まる。φ 2 ~ 10mm 大の黒色、青灰色スコリアを層中に均質に含む。BB II 層との層離面に近づく程褐色が強くなり、粘性を帯びる。また、φ 5mm ~ 50mm 大の AT をパッチ状に含む。AT は褐色~黄褐色であり、粒子が非常に細かい。
- VIII : BB II 層。暗褐色ローム層。粘性、繊りは共に強い。NL 層に比べ、明度が暗く粘性が強い。φ 2 ~ 4mm 大の赤色、赤橙色、黒色スコリアを少量含む。
- IX : SC-II 層。暗褐色スコリア層。粘性弱く、繊りは強い。φ 2 ~ 5mm 大の赤褐色~赤橙色、黄色スコリアが均質に入る。BB II 層・BB III 層と比べ明度が高く、繊り、粘性ともに弱い。
- X : BB III 層。暗褐色ローム層。粘性、繊りは共に強い。φ 2 ~ 7mm 大の赤褐色スコリアを少量含む。BB II 層に比べ黒色度が強く、粘性は強い。
- XI : SC-III 層。黄褐色スコリア層。φ 5 ~ 20mm 大の黒色スコリアを層中に均質に含む。コンクリートのように非常に硬く締まる。沼津市愛鷹山周辺遺跡のような良好な堆積はしておらず、SC-III 層中の黒色帯とスコリア層との細分は出来ない。



第5図 5 地点土層柱状図

#### 4. 調査の成果

本調査地点は、北西方向へ傾斜する丘陵部に位置し、耕作地が段切りによって削平されていた。斜面下位に位置する 4 ~ 6 グリッドに限定されて YLL 層の堆積が認められ、他は BBO 層下位からの土層堆積状況であった。当初、縄文時代早期・中期の遺構、遺物の存在が想定されていたが、本地点においては、ZN 層上位の縄文時代の包含層や旧石器時代の遺物が多数出土する YLU・YLM 層の堆積は認められず、遺構、遺物は検出されなかった。

## 第4章 平成23年度事業

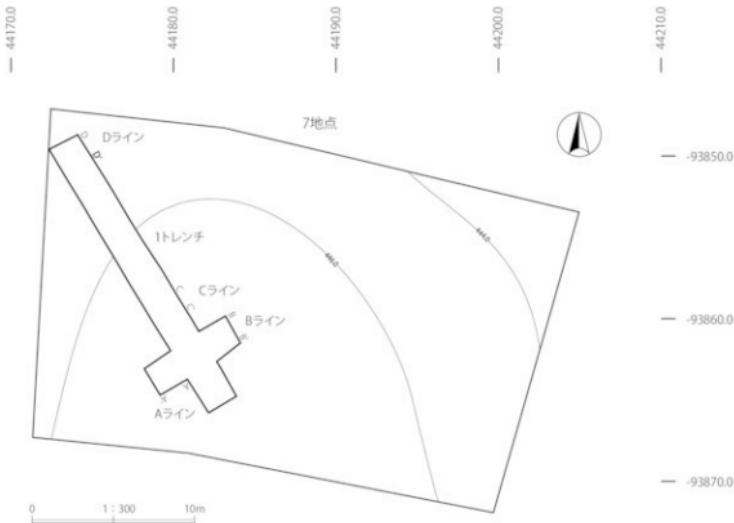
### 第1節 遺跡推定地（7地点）

#### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、社会福祉法人見晴学園と国道1号線を挟んだ北側へ突き出す丘陵の尾根部に位置する。標高は約445.04m～448.11m、比高差は3.07mである。本地点周辺の遺跡では、西約150mには山中城H遺跡（15地点）があり、小支谷を挟んだ西側約50mには遺跡推定地（6地点）が所在している。

#### 2. 調査の概要

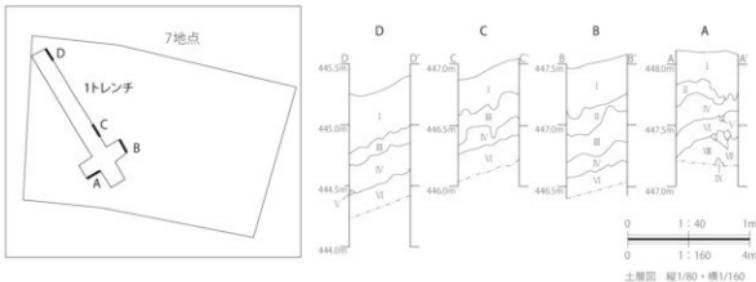
本調査地点は、遺物の表面採集がなく遺跡登録はされていなかったが、箱根山西麓に多数ある遺跡の立地条件との類似性や、山中城H遺跡、山中城I遺跡と近接している事から遺跡推定地となっていた。一次調査は旧石器時代、縄文時代の遺構、遺物の存在を確認するため、北方向へ傾斜する尾根部に19m×2mのトレンチを1箇所、これに直交する形で6m×2mのトレンチを1箇所設定し、遺構、遺物の検出作業を行った。



第6図 7地点全体図

### 3. 基本層序

- I : 表土層。黒色～褐色の腐葉土を主体とした黒褐色土層。全体的に木根等の影響を受けており、粘性、締りは弱い。
- II : ZN 層、YLU 層を起源とする黄褐色ローム層。粘性は強いが、締りは弱い。色調はプライマリーな堆積の YLU 層よりやや灰色が強く、暗い。III 層と類似するが、 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$  大の灰色スコリアを中量含む。
- III : YLU 層。黄褐色ローム層。粘性は強いが、締りは弱い。全体的に汚れた黄褐色ローム層であり、やや灰色が強く暗い色調を呈する。
- IV : YLM 層。黄褐色ローム層。粘性は強いが、締りは弱い。全体的に汚れた色調であり、やや灰色が強く、暗い。
- V : YLS-2 層。赤橙色・黄肌色・黒色スコリア層。黒色スコリアの量がやや多い。ごく一部でのみブロック状の堆積として認められた。
- VI : YLL 層。黄褐色ローム層。粘性は強いが、締りは弱い。調査区全体で確認された。 $\phi 3 \sim 10\text{mm}$  大の赤・灰・黒色スコリアを中量含む。
- VII : YLS-3 層。赤橙色・赤褐色のスコリア層。 $\phi 2 \sim 8\text{mm}$  大のスコリアであり、YLS-2 より赤褐色が強い。ブロック状の堆積として認められた。
- VIII : BBO 層。暗褐色ローム層。粘性は強いが、締りは弱い。YLL 層に比べ暗い色調である。 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$  大の白色スコリアが良く観察される。 $\phi 2 \sim 12\text{mm}$  大の赤橙色、灰色、黒色スコリアを中量含む。
- IX : SC-I 層。赤褐色スコリア層。粘性、締りは共に弱い。調査区東壁南端部でのみ確認した。 $\phi 2 \sim 10\text{mm}$  大の赤褐色スコリアを主体とし、若干の黒色スコリア層を含む。BBO 層下部のごく一部に観察される。



第7図 7地点上層柱状図

### 4. 調査の成果

本調査地点は、現況は緩やかに北西側へ傾斜する地形であるが、調査区南西端部付近では大規模な擾乱が認められ、木根痕も多数確認された。これらは簡易水道施設整備や植林事業等に伴う伐間や大規模な地形の変更が行われた可能性が高いものと考えられる。また、確認された土層は、いずれも締りは弱く、国道1号線を挟んだ丘陵上部から流出したものが再堆積した可能性が高いものと考えられる。本調査地点は、遺跡の成因条件に適した安定した土層堆積は確認できず、遺構、遺物は検出されなかった。

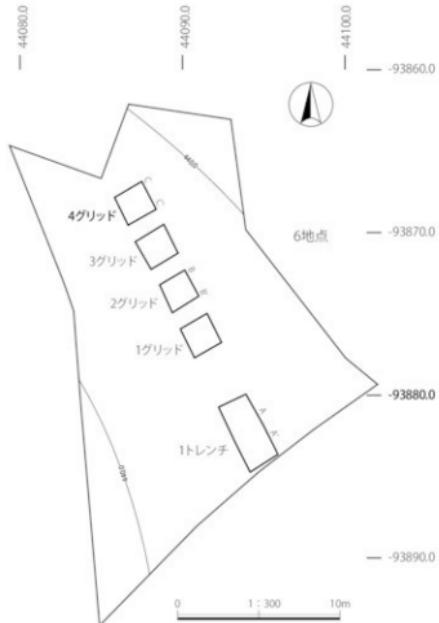
## 第2節 遺跡推定地（6地点）

### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、社会福祉法人見晴学園と国道1号線を挟んだ北側へ突き出す丘陵の瘦せ尾根部に位置する。標高は約441.44m～443.03m、比高差は1.59mである。本地点周辺の遺跡では、南西約90mには山中城H遺跡（15地点）があり、小支谷を挟んだ北東約50mには遺跡推定地（7地点）が所在している。

### 2. 調査の概要

本調査地点は、遺物の表面採集がなく遺跡登録はされていなかったが、箱根山西麓に多数ある遺跡の立地条件との類似性や、山中城H遺跡、山中城I遺跡と近接している事から遺跡推定地となっていた。一次調査は旧石器時代、縄文時代の遺構、遺物の存在を確認するため、北西へ傾斜する丘陵尾根部に4.5m×2mのトレンチを1箇所、2m×2mのグリッドを4箇所設定し、遺構、遺物の検出作業を行った。



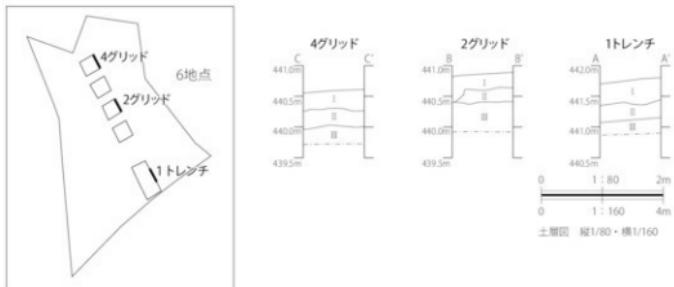
第8図 6地点全体図

### 3. 基本層序

I : 表土層。黒色～褐色の腐葉土を主体とした黒褐色土層。全体的に木根等の影響を受けており、粘性、締りは弱い。

II : ZN・YLU層の混在した再堆積土層。粘性は強いが、締りは非常に弱い。色調は褐灰色を呈し、プライマリーな ZN・YLU 層と比較して全体的に色調が暗い。

III : 粒大でブロック状の褐色ローム層と黄褐色ローム層が混在する再堆積土層。粘性は強いが、締りは非常に弱い。黄褐色ローム層は YLM・YLL 層を起源とするものと考えられ、褐色ハードローム層は NL 層を起源とするものと考えられる。I トレンチ東壁の底面付近には SC-II と類似するスコリアのブロックの混在も確認される。



第9図 6地点土層柱状図

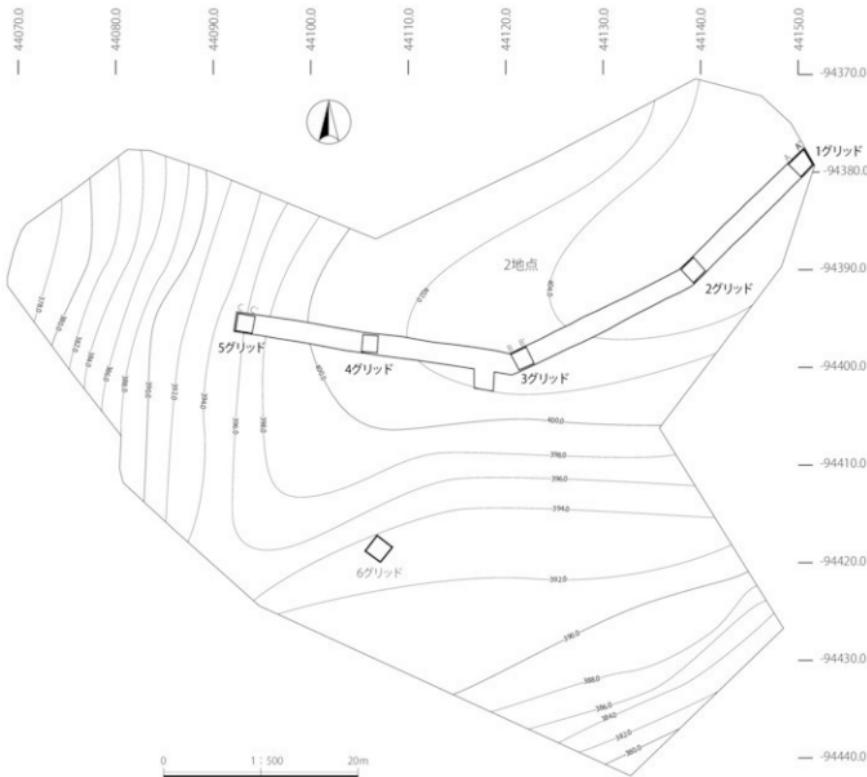
### 4. 調査の成果

本調査地点は、丘陵尾根幅が約4mの痩せ尾根上に位置するため、土層の堆積状況が著しく不良であった。いずれのトレンチ、グリッドにおいてもプライマリーな堆積は認められず、II層はZN・YLU層、III層は、YLM～NL層を起源とする再堆積層と考えられ、国道1号線を挟んだ南東側の丘陵上位から流出したものと考えられる。本調査地点は、遺跡の成因条件に適した安定した土層堆積は確認できず、遺構、遺物は検出されなかった。

### 第3節 横道遺跡（2地点）

#### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、国道1号線の笠原大曲から約300m北東に進んだ丘陵尾根部の幅が狭い傾斜地に位置する。尾根部は南西方向へ傾斜しており、標高は約393.10m～409.33m、比高差は16.23mを測る。本地点周辺の遺跡では、北東約120mには山中城F遺跡（3地点）、南東約200mには12,790点の石器、764点の礫が出土した台崎A遺跡が所在する。



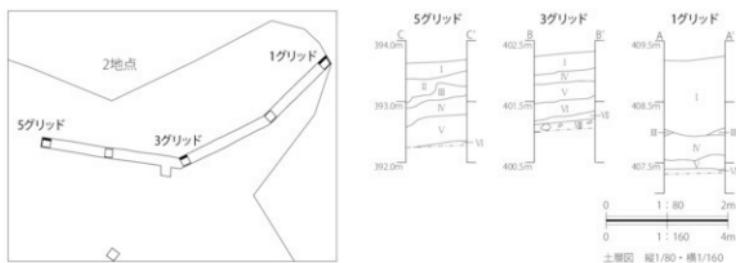
第10図 2地点全体図

## 2. 調査の概要

縄道遺跡は、過去に学校法人施設建設に伴い発掘調査が行われていたが、報告書が未刊行のため詳細は不明であった。三島市遺跡地図には縄文時代の集落跡として登録されており、本調査地点は縄文時代の集落跡、遺物の広がりを確認するため、丘陵の尾根部に幅2m×65mのトレーンチを設定した。また、下層の遺物包含層の存在を確認するため、2m×2mの一次調査グリッドを6箇所設定し、遺構、遺物の検出作業を行った。

## 3. 基本層序

- I : 表土層。1グリッドは耕作土、他は腐葉土を主体とする黒色土層。
- II : 黒褐色ローム層。粘性は強いが締りは弱い。黒褐色のハードローム層を主体とし、三島バミスに類似する橙色のバミスを多量に含む。
- III : 暗褐色ローム層。粘性は強いが締りは弱い。ブロック状のハードローム層を主体とし、三島バミスに類似する橙色のバミスを少量含む。
- IV : 暗褐色ハードローム層。粘性は強いが締りは弱い。白色スコリア粒φ1～2mm大を少量含む。多数の断層が確認される。
- V : 褐色ハードローム層。粘性は強いが締りは弱い。白色スコリア粒φ1～2mm大を少量含む。多数の断層が確認される。
- VI : 暗褐色ハードローム層。粘性は強いが締りは弱い。φ2～5mm大の橙色スコリア粒、白色スコリア粒、黒色スコリア粒を少量含む。多数の断層が確認される。
- VII : 暗褐色ローム層。粘性は強いが締りは弱い。拳大の礫を少量含む。黒色スコリア粒φ3～7mm大を中量含む。
- VIII : 灰紫色礫層。粘性、締りは共に強い。拳大～人頭大の礫によって形成される。



第11図 2地点上層柱状図

## 4. 調査の成果

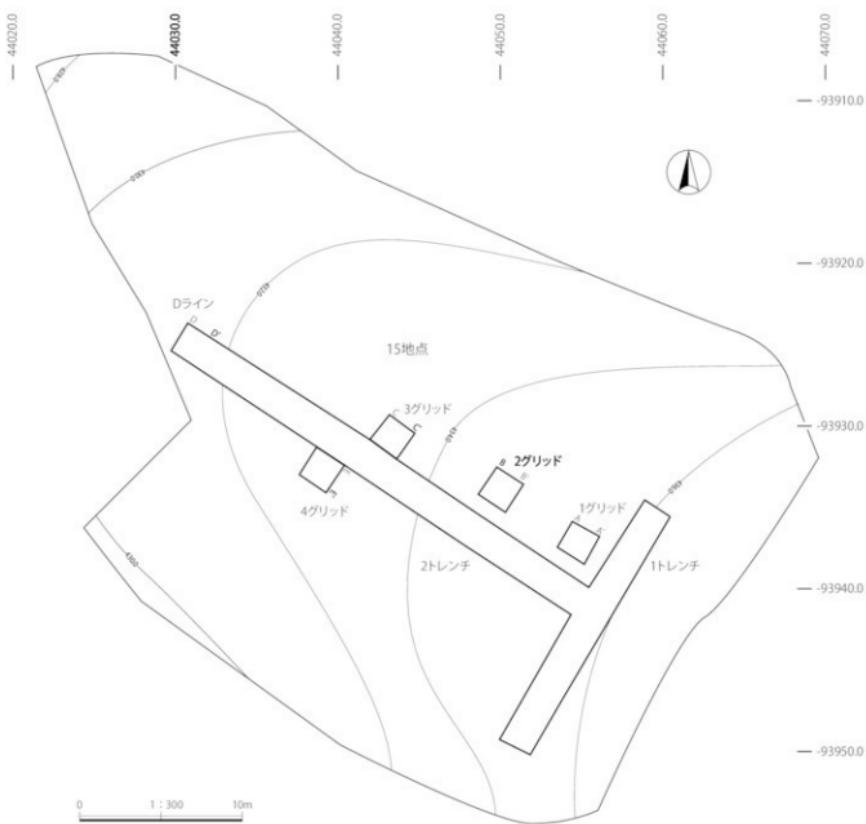
本調査地点は、丘陵尾根部の幅が狭い傾斜地であるため、土層の堆積状況が著しく不良であった。いずれの一次調査グリッドにおいても上部ローム層の堆積は認めらず、確認したⅡ層下位は、おそらくは中部ローム層、下部ローム層に相当するものと考えられる。また、縄道遺跡第1次調査で確認された遺構、遺物の広がりも確認出来ず、6グリッド下位の丘陵の勾配が緩やかな地点において縄文時代の集落跡の範囲は収束するものと考えられた。

## 第5章 平成24年度事業

### 第1節 山中城H遺跡（15地点）

#### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、社会福祉法人見晴学園と国道1号線を挟んだ北西へ突き出す丘陵上に位置する。標高は約431.42m～435.91m、比高差は4.49mである。本地点周辺の遺跡では、北東約90mには6地点があり、さらにその東約150mには7地点が所在する。



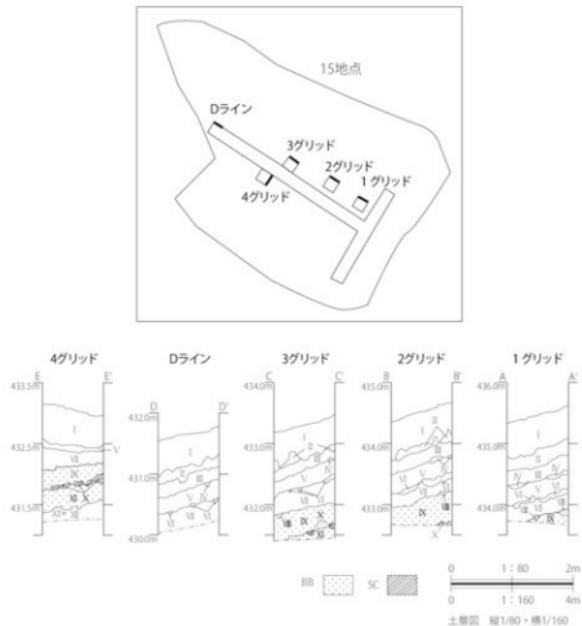
第12図 15地点全体図

## 2. 調査の概要

山中城H遺跡は、縄文時代後期の遺物散布地として登録されており、縄文時代後期の遺構、遺物の存在が想定されていた。一次調査は丘陵頂部の平坦面に2m×17mのトレンチを1箇所、斜面部に2m×30mのトレンチを1箇所設定し、遺構、遺物の検出作業を行った。また、これら2箇所のトレンチの他に土層の堆積状況を確認するため、2m×2mのグリッドを4箇所設定し、遺構、遺物の検出作業を行った。

## 3. 基本層序

- I : 表土層。腐葉土を主体とする黒色土層。
- II : ZN層。黄褐色ローム層。粘性はやや強く、締りは弱い。色調はやや灰色が強く、暗い。粘性はやや強く、締りは弱い。
- III : YLU層。黄褐色ローム層。粘性は強いが、締りは弱い。4グリッドでは、削平を受けており、堆積は認められなかった。北側へ向かって安定した堆積状況がみられるが、プライマリーなYLU層に比較すると、締りは弱く、若干汚れた灰黄色褐色を呈する。
- IV : YLS-1層。赤橙色スコリア層。粘性、締りは共に弱い。 $\phi$ 1～3mm大の黒色、灰色スコリアを少量含有する。レンズ状、ブロック状の堆積状況を呈する。
- V : YLM層。黄褐色ローム層。粘性は強いが締りは弱い。III層に比較してやや灰色が強く、色調は暗い。2トレンチ中央から3グリッド付近では、土層に締りがなく、ブロック状のまとまりで確認される。
- VI : YLS-2層。赤橙色～黄肌色スコリア層。粘性、締りは共に弱い。レンズ状、ブロック状の堆積を呈する。
- VII : YLL層。黄褐色ローム層。粘性は強いが、締りは弱い。3～10mm大の赤・灰・黒色スコリアを中量含む。
- VIII : YLS-3層。赤橙色、赤褐色スコリア層。粘性、締りは共に弱い。 $\phi$ 2～10mm大のスコリアであり、YLS-2より赤褐色が強い。レンズ状、ブロック状の堆積として認められた。
- IX : BBO層。暗褐色ローム層。粘性、締りは共に強い。YLL層に比べ暗い色調であり、 $\phi$ 1～3mm大の白色スコリアが良く観察される。 $\phi$ 2～12mm大の赤橙色、灰色、黒色スコリアを中量含む。
- X : SC-1層。赤褐色スコリア層。粘性は弱いが、締りはやや強い。2～4グリッドでのみ確認した。 $\phi$ 2～10mm大の赤褐色スコリアを主体とし、若干の黒色スコリアを含む。2グリッドではレンズ状、ブロック状に堆積し、3、4グリッドでは安定した堆積状況が確認される。
- XI : BB1層。暗褐色ローム層。粘性、締りは共に強い。2・3グリッドで確認した。 $\phi$ 2～7mm大の赤色、黒色スコリアを小量～中量含む。BBO層のほうが若干暗い色調を呈する。
- XII : NL層。黄褐色ローム層。4グリッドでのみ確認した。粘性が強く、非常に硬く締まる。 $\phi$ 2～10mm大の黒色、青灰色スコリアを層中に均質に含む。また $\phi$ 20～40mm大のATをバッチ状に少量含む。ATは褐色～黄褐色であり、粒子が非常に細かい。



第13図 15地点土層柱状図

#### 4. 調査の成果

本調査地点は、北西へ舌状に突き出す丘陵末端部であり、緩やかな傾斜で安定した地形とみられたが、BBO層より上位の土層はいずれも縦りは弱く、国道1号線を挟んだ丘陵上部から流出したものが再堆積した可能性が高いものと考えられる。本調査地点は、遺跡の成因条件に適した安定した土層堆積は認められず、遺構、遺物は検出されなかった。

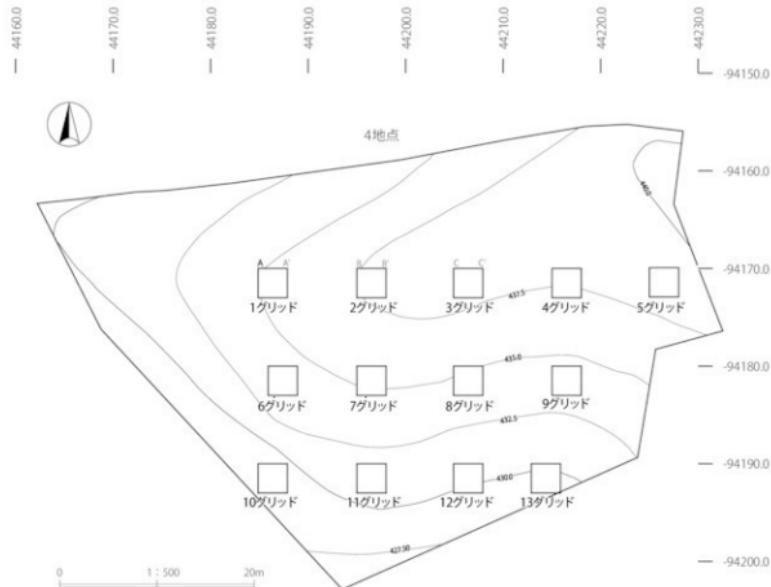
## 第2節 山中城G遺跡（4地点）

### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、国道1号バイパスと箱根旧街道が交わる上長坂地区より東へ約100m入った丘陵に位置する。標高は約426.50m～440.50m、比高差は14.00mを測る。本地点周辺の遺跡では、北に16地点として調査・復元整備を行った箱根旧街道石壁が隣接し、さらにその北には5地点が所在する。

### 2. 調査の概要

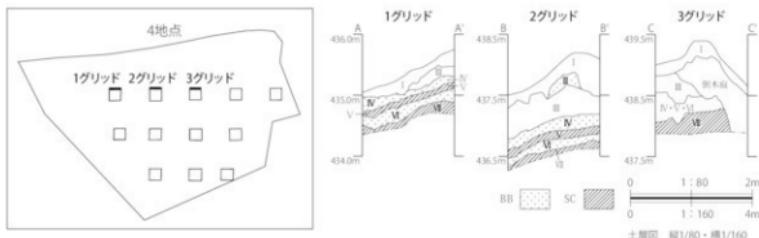
山中城G遺跡は、縄文時代早期・中期の散布地として登録されており、本調査地点においても縄文時代早期・中期の遺構、遺物の存在が想定されていた。一次調査は遺構、遺物の広がりを確認するため、南西方向へ傾斜する斜面地に3m×3mのグリッドを等間隔に13箇所設定し、遺構、遺物の検出作業を行った。



第14図 4地点全体図

### 3. 基本層序

- I : 表土層。黒色～褐色の腐葉土を主体とした黒褐色土層。全体的に竹根、木根等の影響を受けており、粘性、締りは弱い。
- II : BB I 層。暗褐色ローム層。粘性はやや強く、締りは強い。2・7 グリッドで確認された。他のグリッドでは堆積は確認できない。φ 2 ~ 7mm 大の赤色、黒色スコリアを小量含む。
- III : NL 層。黄褐色ローム層。粘性はやや強く、非常に硬く締まる。φ 2 ~ 10mm の黒色、青灰色スコリアを層中に均質に含む。1 ~ 3 グリッド、6・7 グリッドで確認された。NL 層が観察されたグリッドでは高い頻度で小規模な断層が観察される。
- IV : BB II 層。暗褐色ローム層。粘性が強いが、締りは弱い。1 ~ 3 グリッド、6・7 グリッドで確認された。NL 層に比べ明度がやや暗い。φ 2 ~ 4mm 大の赤～赤褐色のスコリアを中量、黒色スコリアを小量含む。3・6・7 グリッドでは下層の BB III 層と混在して確認された。これは斜面地での堆積状況と小規模な断層によって引き起こされているものと考えられる。
- V : SC-II 層。暗褐色スコリア層。粘性、締りは共に弱い。1 ~ 3 グリッド、7 グリッドで確認された。φ 2 ~ 5mm 大の赤褐色～赤褐色、黄色スコリアが均質に入る。BB II・BB III 層と比べ明度が高い。帯状に約 3 ~ 15mm の厚さで堆積する。
- VI : BB III 層。暗褐色ローム層。粘性が強いが、締りは弱い。1 ~ 3 グリッド、6・7 グリッドで確認された。φ 2 ~ 7mm 大の赤褐色スコリアを多量に含む。BB II 層に比べ黑色度が強い。粘性は BB II 層より強く軟らかい感触を受ける。3・6・7 グリッドでは上層の BB II 層と混在して確認された。
- VII : SC-III 層。黄褐色スコリア層。粘性があり、コンクリートのように非常に硬く締まる。φ 5 ~ 20mm 大の黒色スコリアを層中に均質に含む。愛鷹山麓周辺の遺跡のような良好な堆積はしておらず、SC-III 層中の細分は出来ない。



第15図 4地点土層柱状図

### 4. 調査の成果

本調査地点は、丘陵斜面地にあり、特に南方向に急傾斜するため、1 ~ 7 グリッドに限定して上部ローム層の堆積が認められた。また、3・6・7 グリッドでは、BB II・BB III 層が混在して確認された。これは斜面地による堆積状況と小規模な断層によって引き起こされているものと考えられる。本調査地点は、ZN 層上位の縄文時代の包含層、多数の旧石器時代の遺物が出土する YLU ~ YLL 層の堆積は認められず、遺構、遺物は検出されなかった。

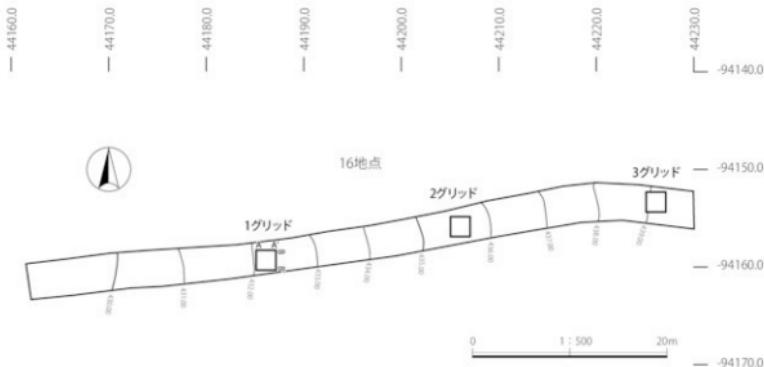
### 第3節 山中城G遺跡（16地点）

#### 1. 遺跡の位置

本調査地点は、国道1号バイパスと箱根旧街道が交わる上長坂地区より東へ約100m入った地点に位置する。標高は約429.05m～439.94m、比高差は10.89mである。調査区の南には4地点があり、北には5地点が隣接している。

#### 2. 調査の概要

本調査地点は、平成8年度に箱根旧街道石畳整備事業が行われた上長坂地区に位置する。バイパスと石畳が交差する部分については、ボックスカルバート工法が採用され、施工後に旧街道を復元する計画であったため、一次調査の前に石畳の移設作業を行った。これについては、「第6章 平成29年度事業 山中城G遺跡（16地点）箱根旧街道石畳復元整備事業」に詳しいため、そちらを参照していただきたい。石材を一次保管場へ搬出した後、想定される旧石器時代、縄文時代の遺構、遺物の存在を確認するため、2m×2mの一次調査グリッドを3箇所設定し、遺構、遺物の検出作業を行った。



第16図 16地点全体図

#### 3. 基本層序

- I : 昭和16年以降に埋設された通信ケーブルの掘り方理土。黄色・褐色ロームブロックを多量に含む。底面付近は碎石、セメントで固められる。
- II : 褐色砂質土層。粘性は弱く、やや綿まる。φ20～30mmの大いな小礫を少量含む。
- III : 黄色・褐色ロームブロックを少量含む褐色、砂質土層。粘性はやや強く、硬く綿まる。レンズ状に堆積する。
- IV : 褐色ローム土層。粘性はやや強く、硬く綿まる。

IV：褐色ローム土層。粘性はやや強く、硬く締まる。 $\phi$  1～2mm 大の橙色、白色、黄色、灰色スコリアを少量含む。

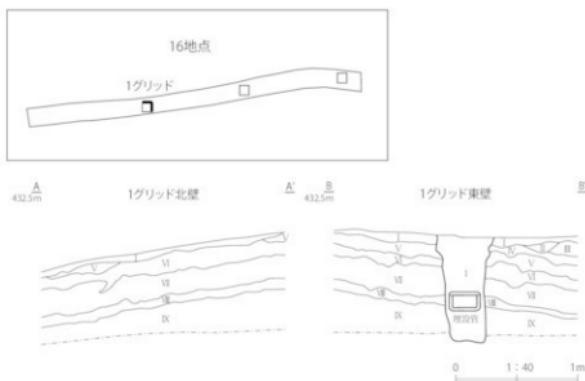
V：黄褐色ローム層。粘性はやや強く、硬く締まる。 $\phi$  1～3mm 大の赤色スコリアを中量含む。

VI：黄褐色ローム層。粘性はやや強く、硬く締まる。 $\phi$  1～3mm 大の白色スコリアを多量に含む。 $\phi$  1～2mm 大の青灰色、黒色、橙色のスコリアを少量含む。

VII：黄褐色ローム層。粘性はやや強く、硬く締まる。黒色マンガン粒を少量含む。

VIII：褐色砂質土層。粘性はやや強く、硬く締まる。 $\phi$  2～4mm 大の赤褐色スコリアを少量含む。

IX：黄褐色ローム層。断层面に沿ってグラウト化しており、下位は暗灰色ロームとなる。粘性はやや強く、硬く締まる。

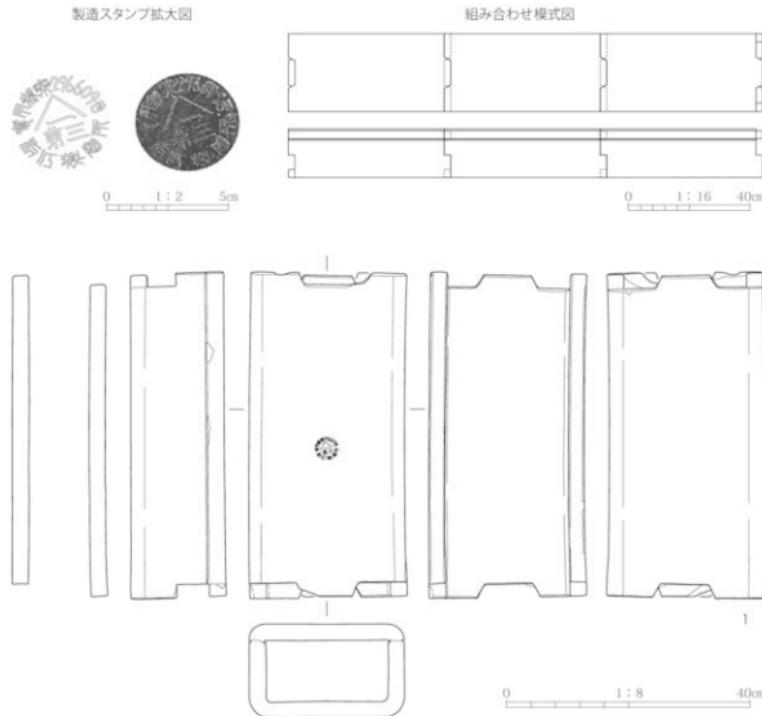


第17図 16地点土層断面図

#### 4. 調査の成果

本調査地点は、全てのグリッドで上部ローム層は確認できず、石畳北側上位の法面において三島バミスと考えられる橙色の軽石を含む中部ローム層の堆積を確認した。このため、本調査地点で確認された土層は中部ローム層下位にあたるものと判断されるが、鍵層が確認されないため具体的な層名については不明であった。また、掘削作業を行った各グリッドでは旧通信省が敷設したと考えられる通信ケーブル埋設管（以下陶製トラフ）を検出した。この陶製トラフは、長さ 53.1cm、幅 25.9cm、厚さ 15.7cm で蓋部と胴部を組み合わせ、これを連続させる形で埋設されていた。蓋中央部には製造スタンプ『杉江製陶所 実用新案 296609 号△第三』と押印されており、実用新案登録番号から愛知県知多郡武豊町に所在する『杉江製陶所（現杉江製陶株式会社）』で製作されたものと判明した。杉江製陶株式会社に問い合わせをしたところ、昭和 16 年に陶製トラフ接続部改良で実用新案登録されているとのことであった。また、使用方法については蓋板、胴部が一体で整形焼成されたものを埋設時に蓋板と胴部を打ち割って分離し、胴部を連結してケーブルを敷設した後に蓋を被せる形で埋設することであり、現在でもこの工法が採用されている場所もあるとのことであった。この陶製トラフが埋設された時期は、実用新案が登録された昭和 16 年以降であること。箱根旧街道石疊の各所には旧通信省の石柱が現存しており、この通信省は昭和 20 年に通信院となるが、昭和 21 年より再び通信省となり、郵政省、電気通信省に分離される昭和 24 年まで存在すること。既刊の箱根

旧街道整備事業報告書には、「子供の頃、兵隊さんが石畳の下に通信ケーブルを埋めるのを見に行った」、「昭和15年頃戦争中の通信網の安全を図るために、旧街道の下にケーブルを埋設した」等の聞き取り調査の記録があること。また、『常滑の陶業百年』によれば、全国の陶管生産量のピークが昭和17年にあり、「昭和18年、19年頃になっていざれの都市にも管路式を採用し、陶製電線管の全盛時代を築いた」との記載があること。以上のことから、この通信ケーブルの埋設時期については、昭和16年から太平洋戦争が終結する昭和20年までの間に限定され、昭和16年から昭和19年頃に埋設された可能性が高いものと考えられる。本調査地点は、旧石器時代、縄文時代の遺構・遺物の存在は確認されなかったが、稀少な産業遺構・遺物が発見された事は大きな成果と考えられる。



第18図 16地点出土遺物

第2表 16地点遺物観察表

種図番号	図版番号	出土場所	種別器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (kg)	備考
第18図	1	図版13	2グリッド	陶製トラフ	53.1	25.9	15.7	18.15 「山一第三 杉江製陶所 実用新案 296609号」スタンプあり

## 第6章 平成29年度事業 箱根旧街道石畳復元整備事業

### 第1節 復元整備事業の経過

本地点は、三島市が「箱根旧街道石畳整備事業」の中で平成8年度に復元整備を実施した上長坂地区の一部に該当する。この整備事業では後年バイパス工事に伴う石畳の撤去、復元を実施することを見越して、当該箇所は部分補修区間としてコンクリート基礎を作らずに石材の欠落部分に根府川石を補充する整備を行っている。（「箱根旧街道石畳整備事業報告書」1999三島市教育委員会）

石材の搬出作業は、数年後に復元作業を実施することを前提に、平成24年度の発掘調査時に株式会社シン技術コンサルが復元データ作成のための詳細なデジタル写真撮影を行った後に実施した。復原作業は、平成29年に小野建設株式会社がシン技術コンサルの支援を受けて行った。江戸時代の石畳は石材を番号通りに本来の位置に設置し、欠損箇所には神奈川県小田原市根府川産の安山岩（以下、根府川石）を補充した。

### 第2節 石材搬出

箱根旧街道石畳は近年のウォーキングブームと健康志向があいまって、人気のハイキングコースとなっている。ここを通るハイカーの工事中の安全を確保するために、平成24年11月6日に石材移設区域の東西両端部を閉鎖し、石畳北側の農作業道を迂回路とするよう案内看板を設置した。

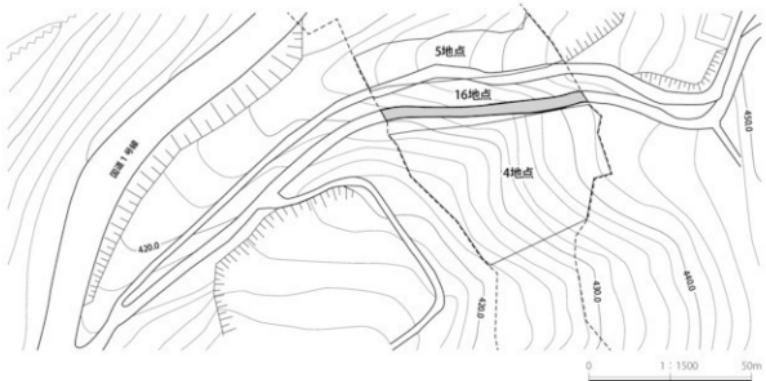
11月7日、石畳に沿った形で約2m×2mのグリッドをNo.1～70まで設定した（第20図）後に、石畳石材の表面にグリッド番号と個体番号をチョークで記入し、デジタルカメラを用いて写真撮影を行った。また、復元作業を見据え移設する石畳部分をSfM（Structure from Motion）によるデジタル写真から3次元データ、オルソ画像を作成した。

石材の搬出は11月8日に着手したが、石畳は国の史跡に指定されているため重機を使用せずに、発掘作業員がバール、つるはし、ジョレン等を使用して手作業で石材の取り外し作業を行った。江戸時代に敷設した石材の裏面には1点ごとに、出土グリッドと個体ナンバーを東に向かって正位になるようにウレタンペイントで記入し、平成8年の復元整備で補充した根府川石には番号を記入せずにグリッド一括として取り扱った。これらの石材は、一輪車やもっこを使用して国道1号との合流部にある車両待機所まで運搬し、フレコンバッグに収納した後にユニックに積んで一時保管場まで搬出した。70グリッド、約252m<sup>2</sup>の石材をフレコンバッグ約100袋に詰めて移動させるのに、17日間で延べ258名の作業員を勤員し、更にユニックとオペレーターを必要とした。さらに石材の搬出に合わせて石畳上面の地形測量を行い、横断面図を3箇所で作成し、石材の移動終了後、12月12日に全景写真撮影を行った。

また一時保管場にあるフレコンバッグはブルーシートで覆って養生し、翌年以降は風化の著しい箇所に随時シートを掛け増して石材の保護保存に努めたが、復元整備工事まで4年半もの時間を要したため、経年劣化によってナンバーが読み取れない事例が少數発生した。

### 第3節 復元整備

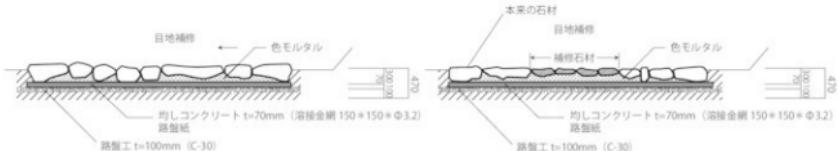
当初の復元整備計画では、工事の進捗状況に合わせて石材を一時保管場から随時搬入して石畳の復元を行う予定であった。平成29年7月8日に基準点測量を行い、直ちに復原整備工事に着手しようとしたところ、



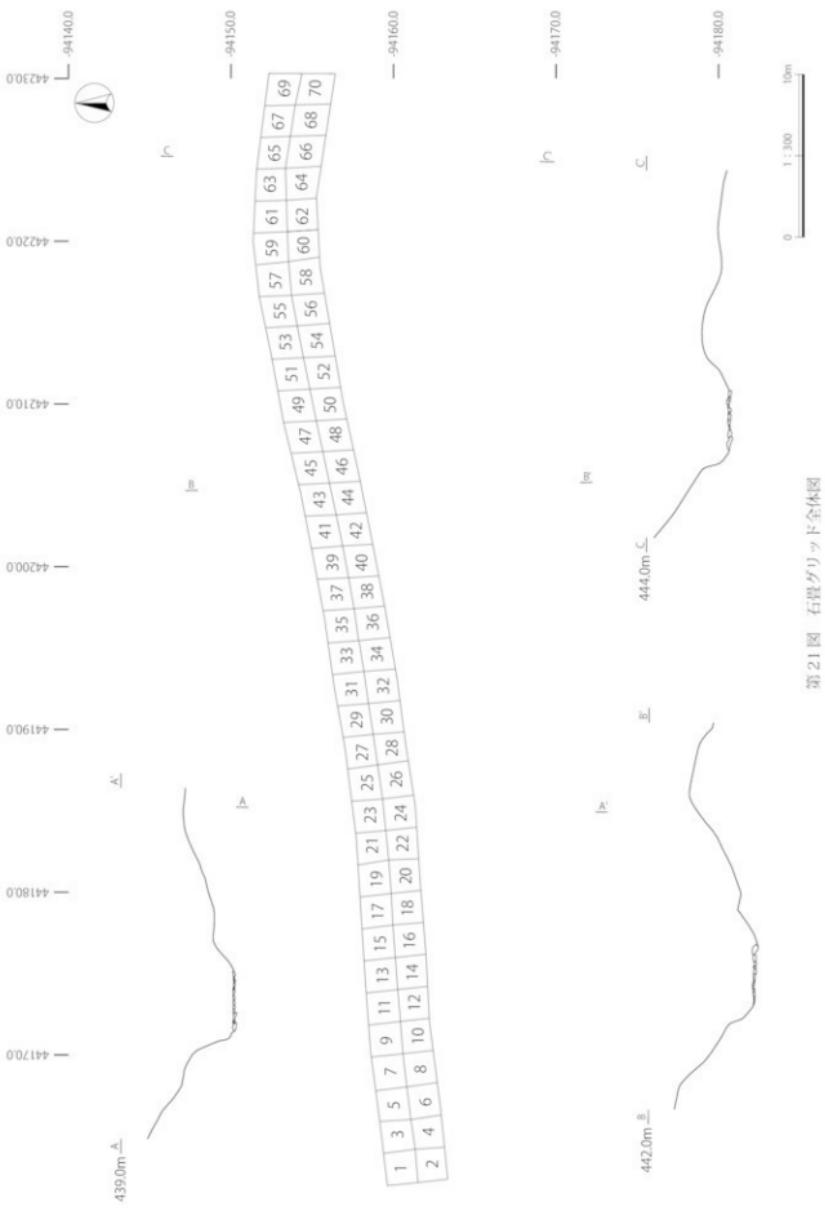
第19図 整備区間位置図

石材の一時保管場付近の養鶏業者から「夏季の暑さで弱った鶏に過度のストレスを与えないように、工事騒音や振動を最小限に抑えて短期間に終了させて欲しい」との要望があった。協議の結果、養鶏所付近での作業期間を短縮するため、全ての石材を一旦別の資材置き場に運搬し、そこから復元整備現場に随時搬入することになった。一方、国道から復元整備現場までは現況の石畳を搬路として利用するために、厚さ20cm以上の保護層を確保する必要があり仮設搬路工を8月11日から23日まで実施した。

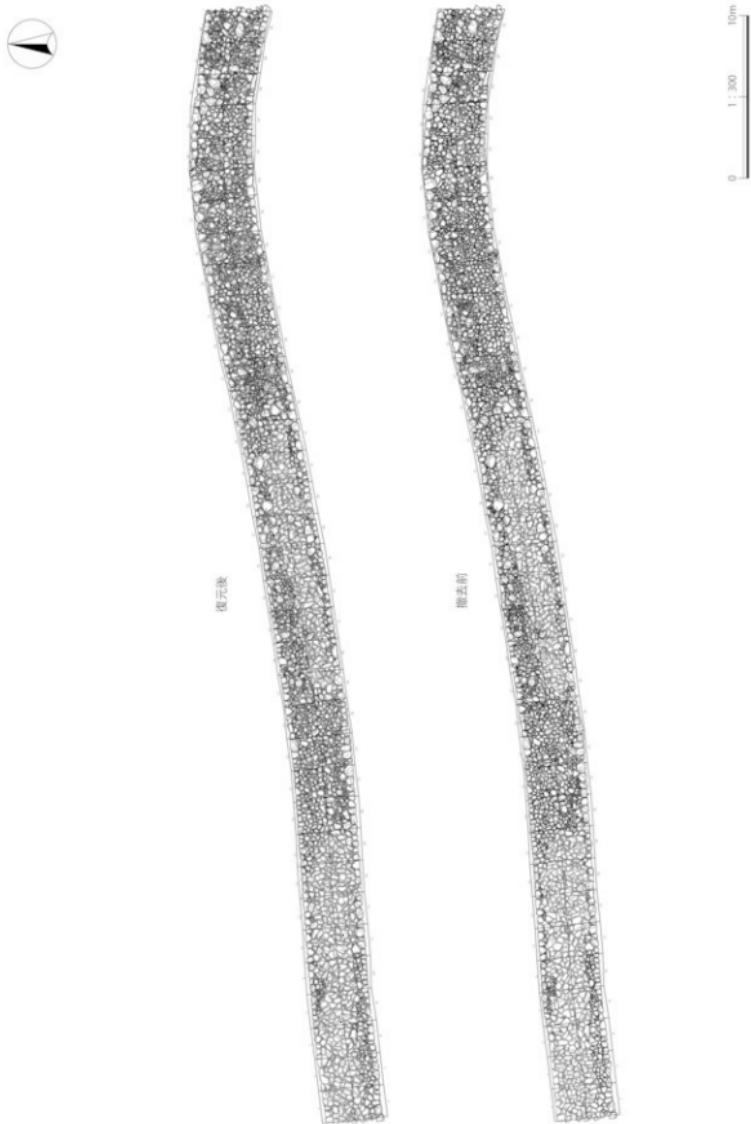
復元作業区間約70mでは8月24日から下層路盤として碎石を100mm敷設し、その上に基礎となる70mmの均しコンクリートを打設した。移設作業の際に使用したNo.1～70までの約2m×2mグリッドを9月1日に再設定し、さらに復元位置を固定するために縁石の外縁に沿う形で型枠の設置作業を行った。均しコンクリートの乾燥を待って、9月5日から石畳の復元作業を開始した。復元は標高の高い東側から西側に向けて既存の石材を番号順に敷き並べ、石畳本来の形状に戻すことが前提である。そのため平成24年にSfM (Structure from Motion) を用いて作成した3次元データとオルソ画像を電子平板に展開し、座標を特定しながらグリッド毎に縁石から内側へ向かって石材を敷き並べた。そして石材の欠落や破損によって間隔が広く空いている個所は、根府川石を充填した。9月12日には文化庁主任文化財調査官佐藤正知氏の現地視察があり「予想以上の復元整備レベルである」との高い評価をいただいた。また目地の色モルタルは着色剤の色と配合比率を変えた6パターンを準備して、周辺の土壌と最も色調の近い組み合わせを採用したが、施工後は全体に赤みの強い発色となった。10月26日、石張工と目地詰めだけで実労37日、延べ205名が作業に従事した、石畳約70mの復元工が終了した。その後UAVを用いた航空写真撮影、デジタルカメラ、6×7判フィルムカメラを用いた地上撮影、仮設搬路の撤去工、周辺の環境整備工を行った後、12月5日に三島市検査課の完了検査を受けて復元整備工事を完了した。



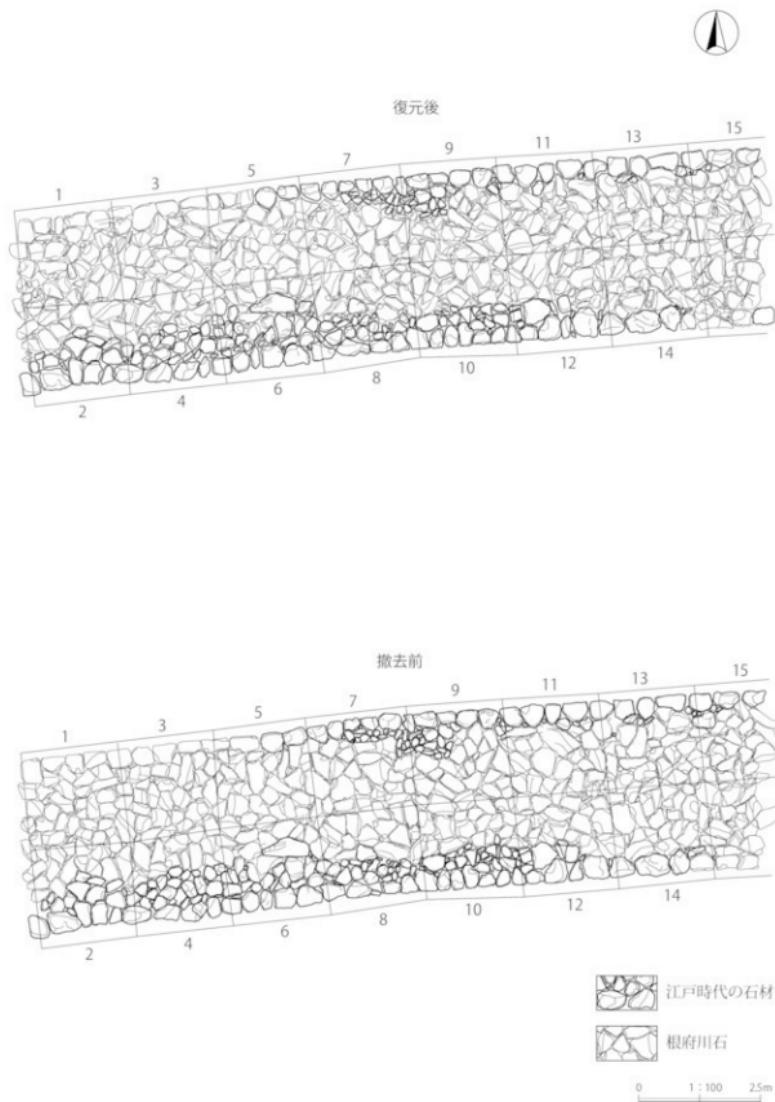
第20図 石畳復元方法概略図



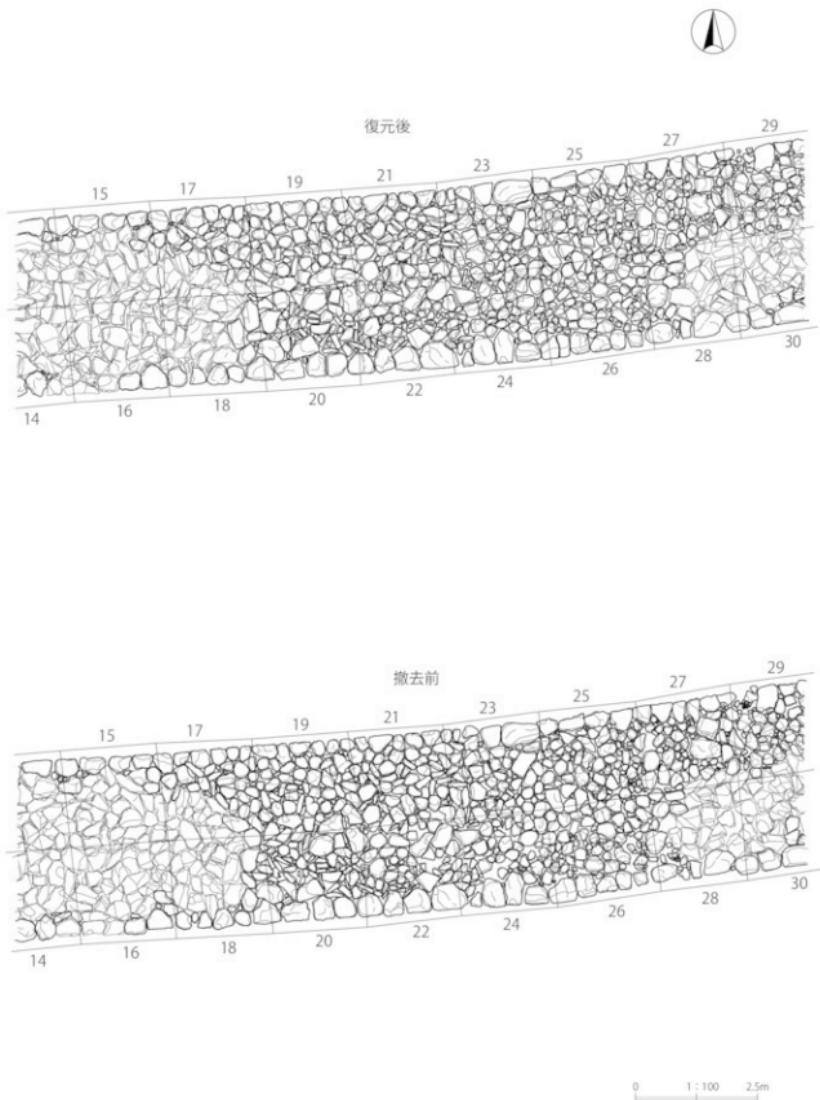
第21図 石畳アプローチ全体制図



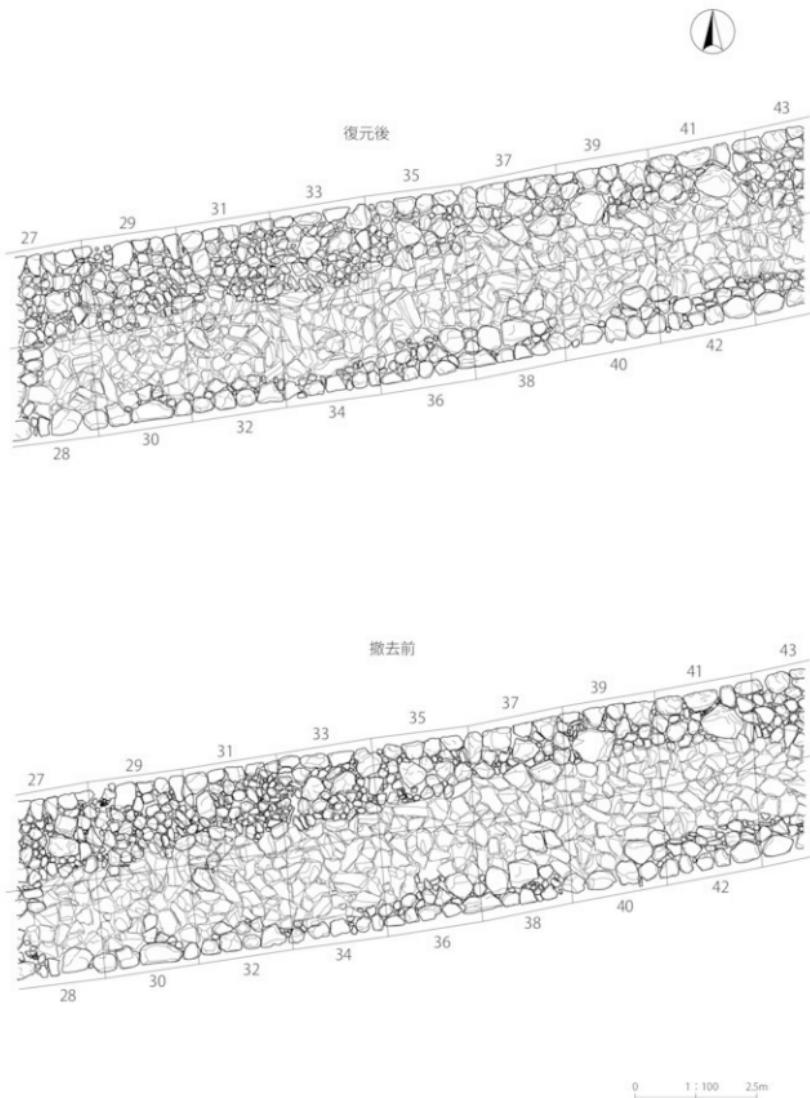
第22図 石畳復元比較全体図



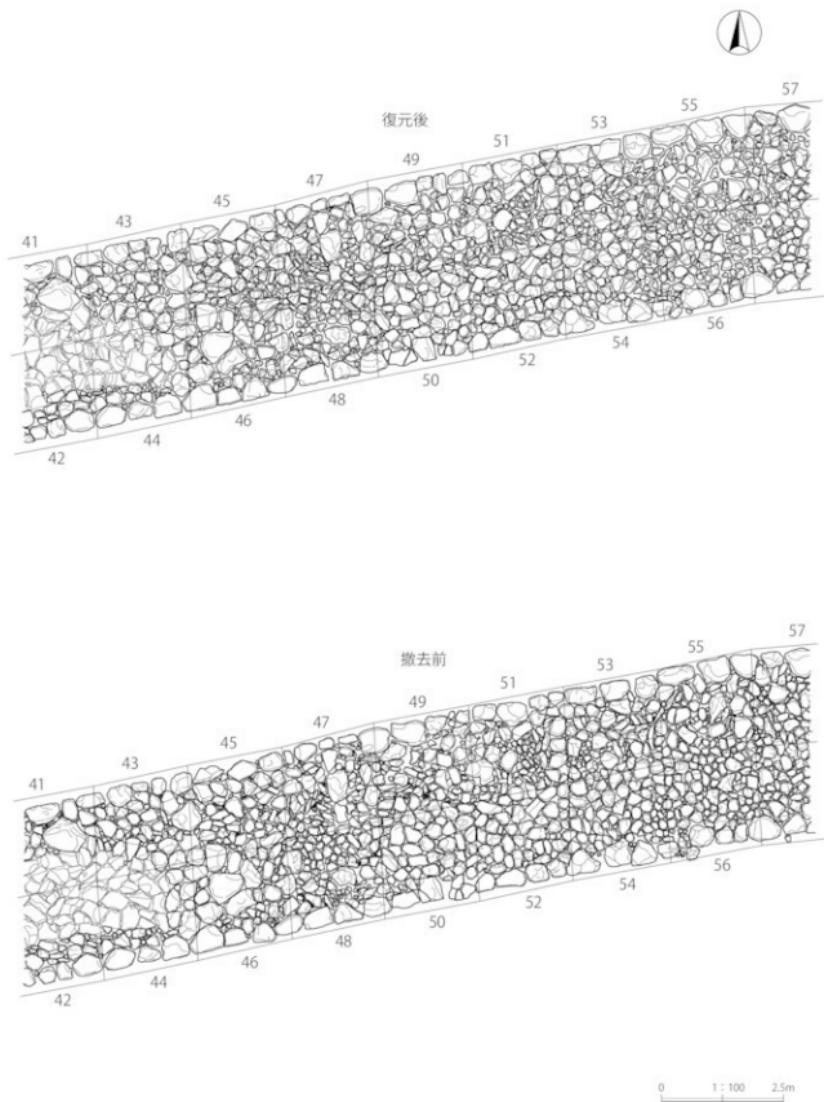
第23図 石畝復元比較図(1)



第24図 石畳復元比較図(2)



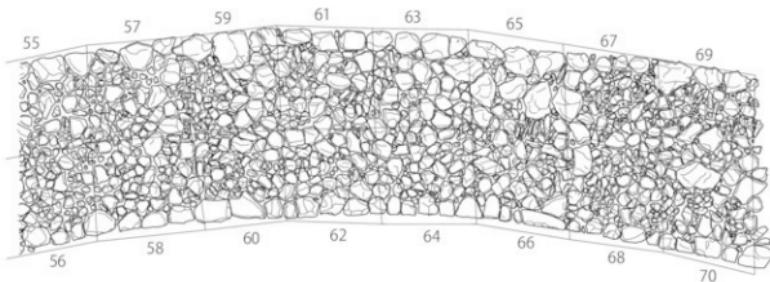
第25図 石畝復元比較図(3)



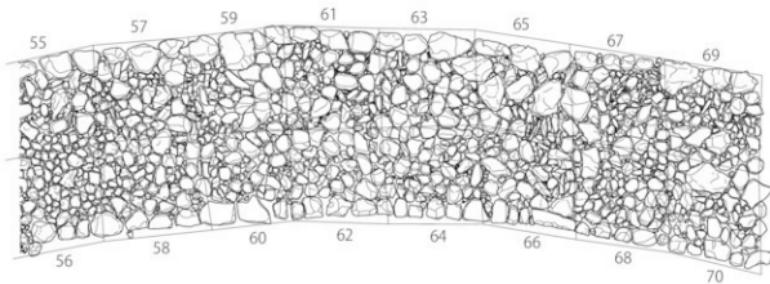
第26図 石畳復元比較図(4)



復元後



撤去前



0 1:100 2.5m

第27図 石畝復元比較図(5)

## 第7章 総括

### 第1節 一次調査

今回発掘調査が行われた山中城F遺跡（3地点）、山中城G遺跡（4・5・16地点）、遺跡推定地（6・7地点）、樋道遺跡（2地点）、山中城H遺跡（15地点）では、いずれも旧石器時代、縄文時代の遺構、遺物は検出されなかった。既に各章で述べたが、これは土層の削平や堆積不良が主要原因であり、勾配がきつく、尾根幅の狭い丘陵は遺跡の成因条件に適していないものと考えられる。一方、山中城G遺跡（16地点）では、箱根旧街道石畳の移設後、旧通信省が埋設した陶製トラフを検出した。昭和3年に刊行された『東京神戸間長距離電話「ケーブル」工事の概要』によれば、足柄・沼津間は、昭和2年9月11日に開通し、小田原・沼津間については「箱根越部分は舊道及新國道共「ケーブル」施設に不適當なるため箱根湯本より蘆の湯迄鷹の巣峠に大部分架空式により施設し其他は大體國道に沿ひ大部分架空式により施設」との記載がある。付表によれば、「地下9.9秆、架空28.7秆、計38.6秆」とあるが、具体的な記載が無いためどの部分が地下埋設なのかは不明であった。本地点で出土した陶製トラフが「箱根旧街道石畳整備事業報告書」にある「昭和15年頃戦争中の通信網の安全を図るために、旧街道の下にケーブルを埋設した」ものであれば、箱根旧街道の西坂（箱根峠～三島宿）は一部を除き尾根の頂部をほぼ一直線に通っており、旧通信省が通信ケーブルを敷設するにあたり、最短距離となる石畳に沿うように敷設したものと推測される。

本地点においては、昭和16年～20年に埋設されたと考えられる希少な産業遺構、遺物を検出できたことは大きな成果といえよう。

### 第2節 復元整備事業

山中城G遺跡（16地点）は、平成8年度実施された「東海道歴史のふるさとづくり推進事業に伴う箱根旧街道石畳整備事業・上長坂地区」にあたる。今回の復元整備事業では平成8年度の整備方針に倣いつつ、3次元データ等の最新の技術を活用し、可能な限り移設前の状況に近づけるよう復元整備を行った。しかし、こぶし大の風化の著しい石材の中には下部に施したウレタンペイントが剥落し、個体番号が不明瞭になったものや、座標通りに復元しても石材のわずかな傾きの違いで隣接する石材と接してしまい元位置にうまく収まらない石材が多数あり、何度も取り外しては据え直すという作業を繰り返し、無事に復元作業を完了することが出来た。

今後の課題としては、「箱根旧街道石畳整備事業報告書」にもあるように、整備された箱根旧街道をいかに維持管理していくかが大きな課題となろう。また、箱根山西麓には国指定史跡山中城跡をはじめとする多数の史跡・名所が所在する。これら箱根山西麓に所在する文化財を一体的に整備・情報発信することで「歴史に触れながら歩く楽しさ」が味わえる歴史の散策路として、国指定史跡箱根旧街道を多くの方々に利用してもらい、箱根山西麓に所在する文化財についての理解が一層深まることに期待したい。

#### 引用参考文献

- 通信省工務局 1928 『東京神戸間長距離電話「ケーブル」工事の概要』通信省工務局
- 寺田光一郎・辻真人 1999 『箱根旧街道石畳整備事業報告書』三島市教育委員会
- とこなめ焼協同組合 2000 『常滑の陶業百年』とこなめ焼協同組合
- 辻真人・伊藤恒彦・小池聰 2017 『山中城D遺跡・山中城E遺跡』三島市教育委員会



# 写 真 図 版





1. 3地点一次調査グリッド完掘状況（東から）

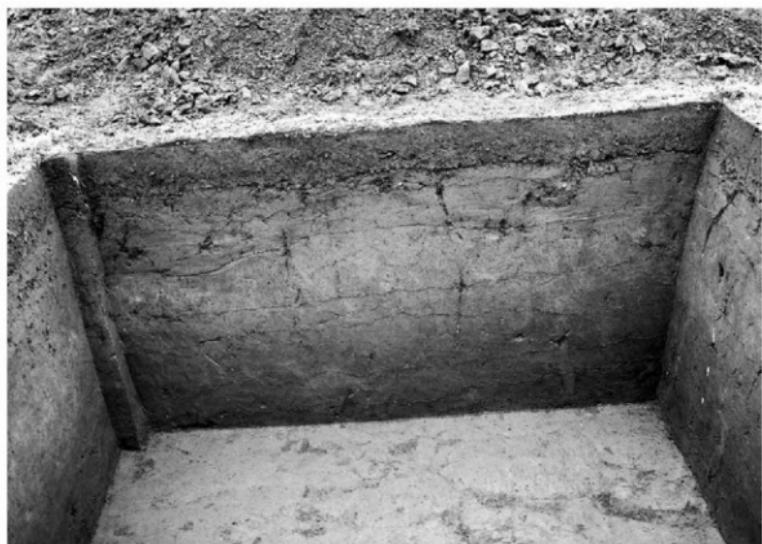


2. 3地点 29 グリッド東理土層断面（西から）

図版 2



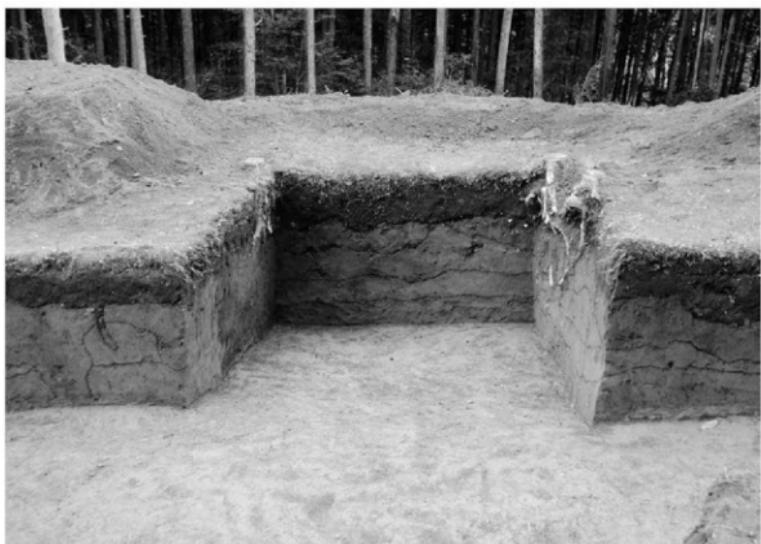
1. 5 地点一次調査グリッド完掘状況（東から）



2. 5 地点 4 グリッド北壁土層断面（南から）



1. 7地点一次調査トレンチ完掘状況（南東から）



2. 7地点Bライン北東壁土層断面（南西から）

図版 4



1. 6 地点一次調査グリッド完掘状況（北から）



2. 6 地点 5 グリッド東壁土層断面（西から）



1. 2 地点完掘状況（北から）



2. 2 地点 1 グリッド北壁土層断面（南から）

図版 6



1. 15 地点一次調査2 トレンチ完掘状況（東から）



2. 15 地点4 グリッド北東壁土層断面（南西から）



1. 4 地点完掘状況 〔垂直〕



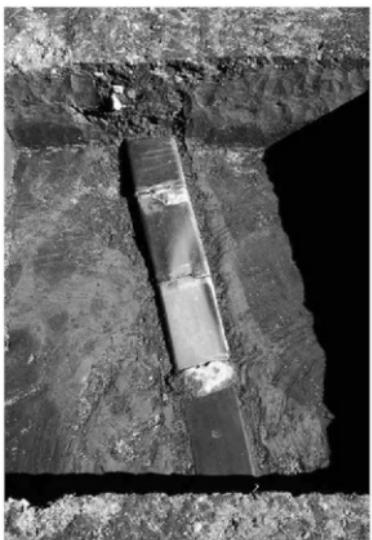
2. 4 地点 2 グリッド北壁土層断面 〔南から〕



1. 16 地点箱根旧街道石費検出状況（東から）



2. 16 地点箱根旧街道石費撤去状況（東から）



1. 16 地点 2 グリッド陶製トラフ検出状況（西から）



2. 16 地点 2 グリッド埋設ケーブル検出状況（西から）



3. 16 地点 1 グリッド東理土層断面（西から）



1. 箱根旧街道石疊検出状況（西から）



2. グリッド設置状況（西から）



1. A ライン石壠断面 〈西から〉



2. B ライン石壠断面 〈西から〉

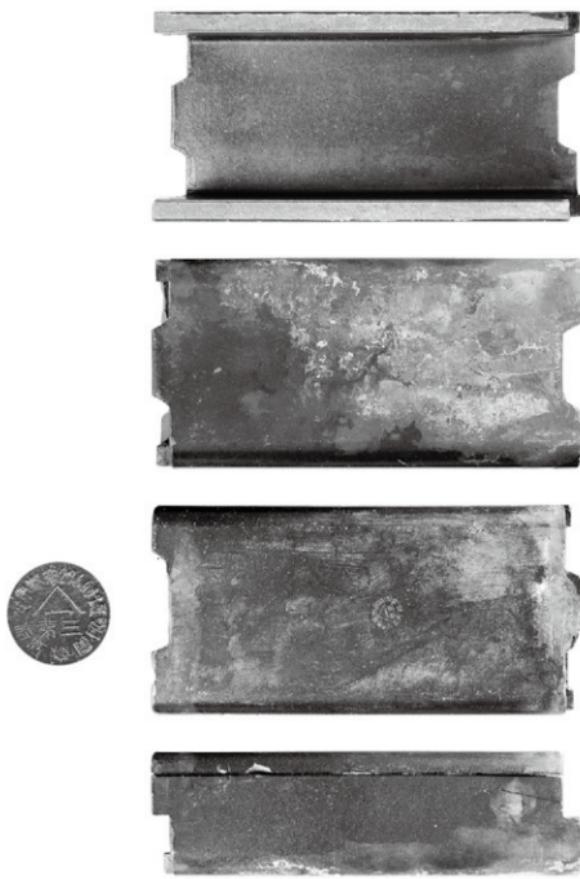
図版 12



1. C ライン石壠断面（西から）



2. 箱根旧街道石壠撤去状況（西から）



1

L. 16 地点出土遺物



1. 石礫清掃・グリッド設定作業（南から）



2. 石礫石材撤去・搬出作業 1（東から）



3. 石礫石材注記作業（西から）



4. 石礫石材撤去・搬出作業 2（東から）



5. 石礫石材撤去・搬出作業 3（東から）



6. 石礫石材撤去・搬出作業 4（北から）



7. 石材搬出作業（東から）



8. 一時保管養生状況（南から）



1. 基準点測量（東から）



2. グリッド復元作業（西から）



3. 石畳石材座標復元作業 1（西から）



4. 石畳石材復元作業 1（東から）



5. 東半部石畳石材復元状況（西から）



6. 石畳石材復元作業 2（西から）



7. 石畳石材座標復元作業 2（西から）



8. UAV 航空写真撮影（南から）

図版 16



1. 箱根旧街道石畳復元状況（西から）



2. 石畳復元状況遠景（南から）

## 報告書抄録

ふりがな	はこねきゅうかいどうほか
書名	箱根旧街道ほか
副書名	笛原山中バイバス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（その5）
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	辻 真人、相澤正信、新井かをり
編集機関	三島市教育委員会
所在地	〒411-0035 静岡県三島市大宮町 1-8-38 TEL055-983-2672
発行年月日	2018年3月23日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
山中城 F 遺跡 (3 地点)	静岡県三島市 笛原新田地先	222-062	253	35° 57'	138° 8'	19950214 ~	257.5	
山中城 G 遺跡 (5 地点)	静岡県三島市山中 新田字上長坂 139-2 他	222-062	251	35° 9' 1°	138° 59' 6"	20061128 ~	36	
遺跡推定地 (7 地点)	静岡県三島市エビノ木	222-062	—	35° 9' 11"	138° 59' 5"	20120111 ~	47.2	
遺跡推定地 (6 地点)	静岡県三島市エビノ木	222-062	—	35° 10"	138° 9' 59' 2"	20120117 ~	24.6	
種道遺跡 (2 地点)	静岡県三島市 笛原新田水谷	222-062	258	35° 55"	138° 59' 4"	20120125 ~	151.8	一般国道1号笛原 山中バイパス建設 工事に伴う埋蔵文 化財の事前調査
山中城 H 遺跡 (15 地点)	静岡県三島市エビノ木	222-062	248	35° 8"	138° 9' 59' 0.6"	20120801 ~	110	
山中城 G 遺跡 (4 地点)	静岡県三島市山中 新田字上長坂	222-062	251	35° 6"	138° 9' 59' 6"	20120919 ~	108	
山中城 G 遺跡 (16 地点) 箱根旧街道	静岡県三島市山中 新田字上長坂	222-062	482	35° 1"	138° 9' 59' 6"	20121106 ~	274.7	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山中城 F 遺跡 (3 地点)	散布地	縄文（前）	なし	なし	
山中城 G 遺跡 (5 地点)	散布地	縄文（早・前）	なし	なし	
遺跡推定地 (7 地点)	推定地	—	なし	なし	
遺跡推定地 (6 地点)	推定地	—	なし	なし	
種道遺跡 (2 地点)	集落跡	旧石器 縄文（早・前）	なし	なし	
山中城 H 遺跡 (15 地点)	散布地	縄文（後）	なし	なし	
山中城 G 遺跡 (4 地点)	散布地	縄文（早・前）	なし	なし	
山中城 G 遺跡 (16 地点) 箱根旧街道	街道跡	中世～近世 現代	箱根旧街道 1 条 理設ケーブル管 1 条	陶製トラフ	
要約	山中城 F 遺跡（3 地点）、山中城 G 遺跡（4・5・16 地点）、遺跡推定地（6・7 地点）、種道遺跡（2 地点）、山中城 H 遺跡（15 地点）では、いずれも遺跡の成因条件に適した安定した土層堆積は確認できず、遺構、遺物は確認されなかった。山中城 G 遺跡（16 地点）では、昭和 16 年以降に埋設された陶製トラフを検出した。また、箱根旧街道石置約 70m の詳細な記録保存を行い、平成 29 年度には、この記録を基に復元整備を行った。				

2018

---

## 箱根旧街道 はが

箱根山中ハイバス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（その5）

印刷発行日 平成 30 年 3 月 23 日  
編集・発行 三島市教育委員会  
印 刷 株式会社シン技術コンサル  
株式会社三島印刷

---